

20th anniversary

留学生センター 20年の歩み

The 20th Anniversary Commemorative Issue of International Student Exchange Center

留学生センター20周年を迎えて

留学生センター長 加賀美 雅弘

留学生センターが1998年に創設されて以来、20年が経ちました。その節目にセンター長を務めさせていただいており、たいへん光栄であると同時に大きな責任の重さをも実感しております。

本センターはこれまで多くの留学生と対応し、また教員研修留学生のような本学ならではの学生を積極的に受け入れ、その学修を支え、教育を担ってきました。毎年世界各地からの留学生を迎え、多様なレベルに応じた日本語の学習機会を提供し、日本文化を多角的に理解するために、学内外でさまざまな機会を設けるなど留学生に対して、精力的に対応し、その結果として本センターは本学の外国との交流の窓口としても大きな責務を果たしてきました。こうして20年を振り返ってみて、これまでセンターに所属してこられた先生方をはじめセンターのさまざまな業務に関わってこられた先生方、国際課をはじめとする事務方の皆さんの多くのご努力にはあらためて厚くお礼を申し上げます。



その一方で留学生センターを取り巻く環境が決して安泰でなく、その運営がたいへん厳しい状況にあることも述べなければなりません。大学全体で人事の凍結が行われている中、本センターでは、転出・退職した教員のあとが埋められず、本来の教員数を大幅に下まわる4名の常勤教員と2名の特任教員で従来通りの業務をまかなう状況にあります。留学生に向けて豊かな教育を行ってきた本センターの歴史を踏まえるとこのようなかたちで、この記念すべき節目を迎えることははなはだ不本意と言わざるをえません。日本語レベルが大きく異なる留学生に対して、数多くの日本語の授業を開設し、多岐にわたる日本理解のための授業を実施し、イベントを開催するといった多くの業務があるにもかかわらず、実務にあたる教員が十分に確保できていないためにこれまでの教育を担保することが難しくなっているのが実情です。実際、外国からの留学生が十分な学習ができるよう教員が限界に近い状態で指導にあたる姿も頻繁に目にしています。学内に設置されたセンターは研究機関と位置づけられていますが、留学生センターでは学部の教員並みに授業や学生指導など教育が大きな業務を占めていることは意外と知られていないように思われます。業務の正常化を進めるために一刻も早く本来の教員を確保することが強く望まれるところです。

折しも本学では教職大学院化が進められ教員養成の総本山としての役割はますます大きくなろうとしています。これからの教員にとって国際的な視野をもつことは教科を問わず不可欠であり、学内においてさまざまな国からの留学生と交流することは必ずや意義あるものになると思われます。そのために、現在留学生対象の授業科目を順次学部学生も必修できるものにしており、活発な意見交換や交流を通して異文化理解や多文化共生に関する学習の機会を増やしています。この点で、留学生を対象にした教育はもちろん日本人学生・大学院生と留学生との交流を進め、優れた教員の養成に寄与してゆくことも本センターの重要な任務だと考えています。留学生センターが本学の中核的な機能を果たしてゆく中で微力ではありますが、これに応えていく所存です。

東京学芸大学留学生センターへの期待

東京学芸大学学長 出口 利定

我が国において大学の国際化、なかんずく学生の国際交流は 1960 年代後半から国の支援もあって活発になり、本学では 1971（昭和 46）年にフィリピンから初めての留学生を迎え、10 年後の 1981 年に外国人留学生はようやく 10 名となりました。年に一人ずつ増えていった勘定になります。1982 年以降、東南アジアを中心とする外国人留学生は着実に増加し、1987 年には三桁の 136 名に達しています。多くの留学生に対応すべく、1986 年に学生部学生課に留学生係が設置され、留学生受け入れ、教育、生活を一括して取り扱い、また本学学生の海外大学への派遣等も担当していました。

増加し続ける留学生対応策として、1993 年には留学生のための宿舎として国際交流会館が完成し、留学生受け入れ態勢も一応の形を整えたと言えます。1995 年 3 月、本学初の海外大学との大学間協定締結は、オーストラリアのキャンベラ大学との間で結ばれました。ここに本学の実質的な国際化の第一歩が踏み出されたといつてよいでしょう。続いて、同年 6 月には中国・北京師範大学、韓国・釜山女子大学、南ソウル大学校との間に協定が結ばれ、現在は 65 を超す海外大学と学生交流あるいは学術交流を締結するに至りました。

本格的な大学のグローバル化が進むなか、1993 年には学内措置として「留学生教育研究センター」が設置され、センターを核に日本語教育、日本事情、留学生専門教育の教員が結集し、留学生教育を系統的に編成することや留学生の生活指導に着手しました。言語、文化、価値観、生活習慣等が異なる留学生への対応は、単に勉学・教育・研究面のみならず生活面においても本学教職員の並々ならぬご支援とご協力がありましたこと、改めて感謝申し上げます。

1998 年には、留学生の数は 300 人を超えたこともあり、学内措置としての「留学生教育研究センター」から懸案であった省令施設としての「留学生センター」へ、さらに「留学生係」から「留学生課」と組織の変更が認められ、ここに留学生教育体制がひとまず完成しました。

以来、本センターは外国人留学生に対する日本語予備教育および日本文化・日本事情等に関する教育、修学上および生活上の指導助言、教育の在り方についての検討、教員研修留学生および日本語・日本文化研修留学生の研修プログラムの作成および指導、大学および大学院における外国人留学生教育の在り方についての研究等を目的とし、外国人留学生と日本人学生、地域社会との交流促進に努力してまいりました。その成果は、今日の本学における様々な国際交流展開に着実に反映されています。

2018 年 1 月に提言された「高等教育における国立大学の将来像」にも掲げられていますが、国立大学のグローバル化は重要な目標の一つであり、なかでも留学生の数はグローバル化の進展具合を表す指標です。本学は第 3 期中期目標に「英語で行う授業等を増やし、日本の教育や日本文化・社会について学びやすい体制を作るとともに、日本の教育を世界に発信する基礎を築く。また、本学学生と留学生との交流の機会を増やす」と掲げ、中期計画には「留学生の協力を得た授業の実施など、本学学生に学内において留学生との交流を体験させる機会を増やす」と記載しています。留学生センターはこの中期目標・中期計画の達成に向け、中心的役割を担っていただければと願っています。

最後に、日頃より留学生の学習、研究、生活支援にご協力いただいている教職員、学生、地域の皆さまに心より感謝申し上げますとともに、国立教員養成系大学・学部のグローバル化のリーダー的存在として、本学留学生センターにはこれからもご支援、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願いいたします。



目 次

留学生センター 20 周年を迎えて 加賀美 雅弘（留学生センター センター長）

東京学芸大学留学生センターへの期待 出口 利定（東京学芸大学 学長）

1. 留学生センターの概要と 20 年の歩み	1
2. 歴代センター長からのメッセージ	13
3. 留学生プログラムの紹介	23
4. 協定校の教員からのメッセージ	39
5. 修了生からのメッセージ	45
6. 在学中の留学生からのメッセージ	53
7. 開設授業一覧	59
8. 特色ある授業の紹介	65
9. 事業紹介	71
10. 教員紹介	83
11. 写真からみる 20 年	91
12. 留学生センターの未来に向けて	97

1. 留学生センターの概略と20年の歩み

本学の国際化と留学生センターの20年を振り返って

1. 留学生センター設置以前の留学生教育

本学における日本語・日本事情教育は、1985年の教員研修留学生（国費留学生）¹の受入れとともに始まった。翌1986年に学生部学生課に留学生係が設置、1987年に留学生担当教官として日本語・日本事情担当教官1名、留学生専門教育教官²1名が配置され、同年にはじめて学部留学生を迎えた。この年10月時点の留学生総数は153名である。1985年10月時点と比べて2倍以上になったわけだが、その後、国内外の情勢変化の余波を受けて、留学生は中国人研究生を中心に激増し、1990年10月時点には428名に膨れ上がった。留学生の激増は全国的な現象であり、同年には、国立大学において「国立学校設置法施行規則」に基づく「留学生センター」の設置が開始される。本学でも、激増した留学生に対し教育・研究面および生活面（在籍確認や宿舍問題等）の対応を組織的に行う態勢の整備に迫られ、まず、1993年11月に学内措置として「留学生教育研究センター」が設置された。省令施設として留学生センターが設置される5年前のことである。留学生教育研究センターは、留学生担当教官（日本語・日本事情担当教官3名、留学生専門教育教官5名）はじめ留学生に関わる人員が集結する場となり、全学留学生の教育・指導にあたった³。

2. 省令施設・留学生センターの設置と業務概要

2.1 留学生センターの主な業務と組織

1998年4月、省令による学内共同教育研究施設として留学生センターが本学に設置された。留学生センターの業務の柱は、以下の6点である⁴。

- (1) 外国人留学生に対する日本語及び日本理解等に関する教育⁵
- (2) 外国人留学生に対する修学上及び生活上の指導助言
- (3) 外国人留学生に対する教育の在り方についての検討及び連絡調整
- (4) 外国人留学生のうち教員研修留学生及び日本語・日本文化研修留学生の研修プログラムの作成並びに指導
- (5) 海外への留学希望者に対する修学上及び生活上の助言
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な教育・研究等の業務

上記の業務を遂行するにあたって、留学生センターは専任教員⁶6名、兼任教員5名による3部門体制（「日本語教育部門」「専門基礎教育部門」「留学生指導部門」）でスタートした。兼任教員5名はいずれも留学生が比較的多い研究室に配置されていた留学生専門教育教員である。その後、表1のように部門の新設や改編を行い、2018年現在は専任教員4名、特任教員2名による3部門体制（「日本語

¹ 教員研修プログラムの詳細については3章を参照のこと。

² 「留学生専門教育教官」は「留学生に対する教育研究指導上の教官の負担を軽減するため、留学生数の多い学部または研究科の基幹的講座に」（『学制百二十年史』「四 大学等における留学生の受入れ体制」より）1988（S59）年から配置されるようになった講師。

³ 留学生センター設置以前の本学の国際化・留学生をめぐる状況については、東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会編（1999）『東京学芸大学五十年史 通史編』「第一章第四節 学生生活」を参照されたい。留学生教育研究センターの初代センター長を務めた小林志郎氏が執筆されている。

⁴ 「東京学芸大学留学生センター規程」より

⁵ 当初の規程では「外国人留学生に対する日本語及び日本文化・日本事情等の教育」であったが、2010（H22）年の部門再編にともない、「～日本理解等に関する教育」と改正。

⁶ 法人化にともなう名称の変更は2004（H16）年以降であるが、便宜上第2節以降は、配置時の正式名称に関わらず、「教官」は用いずすべて「教員」とする。

教育部門」「日本理解教育部門」「生活支援部門」) となっている。なお、生活支援部門は長期欠員となっているため、他の2部門所属の教員が兼任して業務に当たっている。

表1 留学生センターの部門別人員配置の推移

1998～ (H10)	日本語教育部門 (専任 5)	専門基礎教育部門 (兼任 5)		留学生指導部門 (専任 1)
2003～ (H15) ⁷	日本語教育部門 (専任 5)	専門基礎教育部門 (兼任 4 → 0)	短期留学プログラム 部門 (専任 1)	留学生指導部門 (専任 1)
2010 春 (H22)	日本語教育部門 (専任 4)	日本理解教育部門 (専任 2)		生活支援部門 (専任 1)
2010 秋～ (H22)	日本語教育部門 (専任 4)	日本理解教育部門 (専任 2)		生活支援部門 (専任 0)
2018～ (H30)	日本語教育部門 (専任 2・特任 2)	日本理解教育部門 (専任 2)		生活支援部門 (専任 0)

2.2 日本語予備教育の実施

留学生センター設置の要件として、国費の研究留学生および教員研修留学生を対象とし、専門教科を学ぶための基礎日本語力を養うことを目的とした日本語予備教育の開講があった。本センターでは初級および中級の予備教育を「日本語研修コース」と称し、約 600 時間 (18 コマ (36 時間) / 週 × 17 週) のコースを年 2 回実施した。

全学留学生対象日本語科目のレベル設定の見直し・変更にともない、2009 年秋学期より「日本語研修コース」という名称は用いず、5 レベルある日本語コースのうち入門・初級段階の「日本語 5」および「日本語 4」を予備教育実施のコースとして位置付けることとした。この時の大きな変更点は、

(1) 予備教育も全学の授業期間に合わせ 1 期 15 週とし、週当たり時間数も減らしたこと (「日本語 5」: 15 コマ (30 時間) / 週 × 15 週)、(2) 予備教育を全学留学生対象の日本語コースの一部に組み込むことによって主たる対象以外の留学生も受講しやすくした⁸こと、である。その後、日本語予備教育は徐々に学習時間数を減らし、現在に至っている⁹。こうした予備教育の位置付け、学習内容および時間数の見直しの背景には、対象者とともに教員研修留学生の特性に対する配慮という内的要因のほか、国費研究留学生の不安定な配置数、初級段階の日本語授業を必要とする特別聴講生 (交換留学生) の増加、学内の財政状況 (非常勤講師の削減要求)、学部・大学院を兼任するようになった教員負担の軽減といった外的要因もあった。文科省から配置される国費の研究留学生や教員研修留学生が何名になるか、例年、開講の 2 ヶ月前程にならなければ確定しないという状況は、予備教育開始当初から現在に至るまでコース運営を困難にする要因の一つとなっている。

日本語予備教育にとくに求められているのは入門・初級段階であるが、配置された人数が十数名であっても数名であっても、コースの設定目標のために行うことは基本的に変わらない。時に、1、2 名のクラスを開講せざるを得ない状況があることは本センターだけの問題ではないので、今後近隣の

⁷ 部門再編の規程改正年および短期留学プログラム部門の専任教員の着任は 2003 年であるが、改正の適用は短期留学プログラムが始まった 2002 年 4 月からとなっている。

⁸ 改編以前にも、本人の希望や指導教員の申し出があれば、研究生や特別聴講生を受け入れてきたが、週 18 コマすべての受講を課していたため、専門の授業や各プログラムの科目の受講と併行させることは難しかった。

⁹ 現状については 7 章を参照のこと。

予備教育受入れ大学と連携するなど検討すべきではないかという議論がこれまでもあったが、個々の大学が予備教育生を受け入れるメリット・デメリットを考え、実務レベルで検討するには至っていない。

2.3 全学留学生対象科目と学部との連携

全学留学生対象科目は学部開設されている正規科目と留学生センターが開講する非正規科目からなっている。学部開設の留学生対象科目は、文部科学省による「外国人留学生の一般教育等履修の特例について（通知）」（S37 [1962]）に基づくもので、「一般教育科目として外国語等に代えて日本語・日本事情を履修できること」とされていた。いわゆる「日本語・日本事情科目」である。本学では学部留学生が初めて入学した 1987 年度に「RL・RG」科目¹⁰として開設された。

しかし、本学の全留学生に占める学部留学生の割合は小さく、日本語教育を必要とする留学生の大半は研究生や交換留学生、国費のプログラム生など非正規の留学生である。日本語教育部門では、予備教育の「日本語研修コース」とは別に、正規・非正規にかかわらず全学の留学生を対象に 4 レベル（初中級～上級）の日本語科目を提供した。表 2 は、センター発足当初の 2001 年度春学期の日本語科目構成である。上級レベルの「*」を付した科目は、学部開設の留学生対象科目¹¹で、日本語教育教室が担当した。当時は、センター発足以前から在任していた専任教員 3 名が日本語教育教室兼任でもあったため、連携が容易であったと言える。

表 2 2001 (H13) 年度春学期の日本語科目構成（プレースメントテスト受験者 110 名／420 名）

レベル	会話 A	講読 A	作文 A	文法 A	特別演習			備考
日本語Ⅰ	1*	1*	1*	1*	1 (文学)			** 秋学期は「発音」
日本語Ⅱ	1	1	1			1 (漢字)	1 (文法)	
日本語Ⅲ	1	1	1			**		
日本語Ⅳ	2	1 [読解]						
予備教育 [日本語研修コース]			入門・初級・中級					2.2 参照

（東京学芸大学留学生センター編（2002）の記載情報から作成）

翌 2002 年秋学期より英語による短期留学プログラム (ISEP)¹²が開始されたことを受けて、2003 年にはさらに ISEP 生対象に「日本語入門」「基礎日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を開講している。その後、再度レベル設定を見直し、2009 年秋学期より「日本語研修コース」および ISEP 対象の日本語科目を統合する形で、全学留学生対象日本語科目を 5 レベル（入門～上級）とし、現在に至っている。表 3 は 2018 年度春学期の日本語科目構成である。表中の「*」を付した科目は、表 2 と同じく、学部開設された留学生対象の CL 科目で、現在は国語教育教室が開講している。学部留学生は、もちろん学部開設科目以外の科目を受講しても単位にはならないが、交換留学生や研究生など学部留学生以外の学生は、学部開設・センター開講にかかわらず受講することができる。日本語教育を専門とする学内の教員および関連組織が連携することによって、同レベルの科目の重複開講を避け、留学生対象科目構成の整合性を保つことができる。教員数の削減が進む中、限られた人員で整合性のあるコースを運営していく

¹⁰ 現在の「CL・CA」科目に相当する。学部開設以前に、1985 年に受入れを開始した教員研修留学生を対象に日本語・日本事情教育を開始している。

¹¹ 学部での名称は、「上級日本語会話 A」「上級日本語講読 A」「上級日本語作文 A」「上級日本語文法 A」。

¹² プログラムの詳細については 3 章を参照。

ためには、今後もこのような連携を強めていくことは欠かせない。現在、学部との連携は、留学生対象科目の相互乗り入れだけでなく、国語科教育教室・日本語教員養成関連科目受講生の授業見学受入れ、多文化共生教育教室の科目担当などにおいても行われている。

表3 2018 (H30) 年度春学期の日本語科目構成 (プレースメントテスト受験者 135 名/232 名)

レベル	総合	会話	講読	作文	文法	聴解	漢字	特別演習				
日本語1	1	1*	1	1+1*	1	1	1	1ドラマ	1ササゲーション	1ビジネス	1小説	1プロジェクト
日本語2	1	1×2	1×2	1×2	1×2	1	1	1マンガ	1音読			
日本語3	2	1	1	1	1	1	1	国研生演習				
日本語4	4	1	1	1			1	国研生演習				
日本語5	4	1	1	1		1	2					

日本語科目を受講するためには日本語プレースメントテストの受験を課しているが、2018 年春学期のプレースメント受験者は 135 名であった¹³。同年 5 月 1 日現在の留学生総数は 232 名である。2001 年春学期の留学生総数 420 名 (同年 5 月 1 日現在) およびプレースメントテスト受験者数 110 名と比較してわかるように、留学生総数は激減しているが、プレースメントテスト受験者数は 2001 年よりも 2018 年春学期のほうが多い。つまり、留学生センターが提供する日本語科目の受講者数および割合はむしろ増えているのである。これは、日本語科目の主たる受講者が研究生から交換留学生へと移行してきたことによる。交換留学生は基本的に留学期間中に履修した科目を帰国後母校での科目に振り替えることが求められるため、専門研究の手段として日本語を学ぶ研究生よりも日本語履修のニーズが高い。留学生の質的变化については 3.1 においてあらためて述べる。

日本語以外の留学生対象科目 (いわゆる「日本事情科目」) も、日本語科目と同様に、学部開設科目と留学生センター開講科目に分かれる。センター発足当初、前者は学部が CA 科目として開設する「日本の文化と社会」、後者は「専門基礎研究」「比較研究基礎」という科目名でスタートした。前者、後者いずれも留学生専門教育教員 (2.1 参照) が担当した。つまり、センター発足当初の「日本語・日本事情科目」はセンターの専任教員が「日本語」の部分で、センターの兼任教員である留学生専門教育教員が「日本事情」の部分で、というようにおおよその役割分担をしていた。

その後、対象とする留学生の変化にともない、後者は＜専門基礎科目＞＜日本研究科目＞＜日本理解科目＞と名称と内容を変えてきた (表 4 参照)。2003 年には英語による短期留学プログラム (ISEP) 担当のセンター専任教員 1 名が新たに着任し、専門基礎科目担当にも加わる。が、2004 年の大学法人化後、留学生専門教育教員のポストは順次学部へ吸収されていったため、該当の教員が授業担当を継続することは次第に難しくなっていって、学部開設の「日本の文化と社会」は 4 学系が 2 枠ずつ提供することとなった。当時、留学生センターは科目開設権を持っていなかったため、センターの専任教員が独自に学部へ科目を開設することはできなかった。

留学生センターが開講する日本語以外の科目を＜専門基礎科目＞から＜日本研究科目＞＜日本理解科目＞へと名称と内容を変更していった背景には、留学生専門教育教員ポストの消滅もあるが、先述した通り、大きくは留学生対象科目の受講者が大学院進学を目指す研究生主体から学部レベルの交換留学生主体に変化していったことが影響している。また、2015 年に長年の懸案であった授業開設権

¹³日本語プレースメントテスト受験者数の最大値は、記録に残っている限りでは、2003 (H15) 年春学期の 200 名である (同年 5 月 1 日現在の留学生総数は 503 名)。

を得て（教養科目に限って）、留学生センターは、学部開設の「日本の文化と社会」にかえて「多文化共修科目」を春学期・秋学期各2枠開設し、センター教員が授業担当にあたっている¹⁴。

表4 日本語以外の留学生対象科目の科目構成の推移（年間）

	学部開設科目 [担当教員]	留学生センター開講科目 [担当教員]
1998～ (H10)	日本の文化と社会A～H [留学生専門教育教員]	専門基礎研究A～F 比較研究基礎A・B [留学生専門教育教員]
2003～ (H15)	日本の文化と社会A～C E～G [留学生専門教育教員]	<専門基礎科目> 専門教育基礎（前期2、後期2） 比較研究基礎A・B 日本歴史入門・現代日本文化研究 [専任教員・留学生専門教育教員]
2008～ (H20)	日本の文化と社会A～H （4学系各2枠開設）	<日本研究科目> 日本研究A～D 日本研究演習A～D [専任教員・非常勤講師]
2015～ (H27)	多文化共修科目A～D [留学生センター開設：専任・特任教員]	<日本理解科目> 日本理解A～H [専任教員・学部教員・非常勤講師]

2.4 留学生指導・生活支援の問題

2.1～2.3では、留学生センターの業務のもっとも大きな割合を占める、外国人留学生に対する修学上の支援体制について述べてきた。留学生にとっても修学面で成果を上げることが留学のもっとも大きな割合を占める部分であると思うが、日本での生活面での安定や充実もまた重要な側面である。生活面での問題に目を向けると、残念ながら、この20年の間には交通事故、傷害事件、病気による帰国などの事例に遭遇することもあった。初期の頃は私費研究生の在籍確認や住宅の確保、保証人や経済的な問題などが大きかったが、近年では留学生の心身の健康の問題がより大きくなったように思う。これもまた教育・支援対象である留学生の質的な変化と関連する。

「生活上の指導助言」を主として担う留学生指導部門には留学生センター発足以来専任教員1名が配置されていた。2010年に「生活支援部門」と名称を変えたその年に、生活支援部門の専任教員が辞職した後、後任が補充されることなく凍結状態となっている。生活支援部門が行っていた業務は他部門の教員が兼担することとなったが、不十分な体制のまま現在に至っている。しかし、大学全体の学生支援体制は整備されてきており、今後は保健管理センター・学生相談室・障がい学生支援室・キャンパスライフ委員会など関係組織との連携を深めていくことがますます重要となっていくだろう。

3. 大学の国際戦略と留学生センターの役割

3.1 本学の留学生構成と教育・支援の対象の変化

この20年で本学の留学生構成は大きく変わった（図1）。その変化とは、大学院レベルの留学生（研究生・大学院生）の減少と学部レベルの交換留学生（図1では「聴講生等」）の増加である。大学院生

¹⁴ 日本理解のための科目や課外に提供しているさまざまなプログラムについては7章を参照のこと。

および大学院進学を目指す研究生（主に私費研究生）は 2002 年をピークに減少の一途をたどっている。本センター発足当時（1998）、全学留学生に占める大学院生・研究生の割合は 79.1%であったが、20 年後の今日（2018）では 44.4%にとどまる。2019 年度からの教職大学院定員の拡大、大学院修士課程の再編によって、大学院留学生および大学院進学を目指す研究生の数はますます減少していくだろうと推察される。

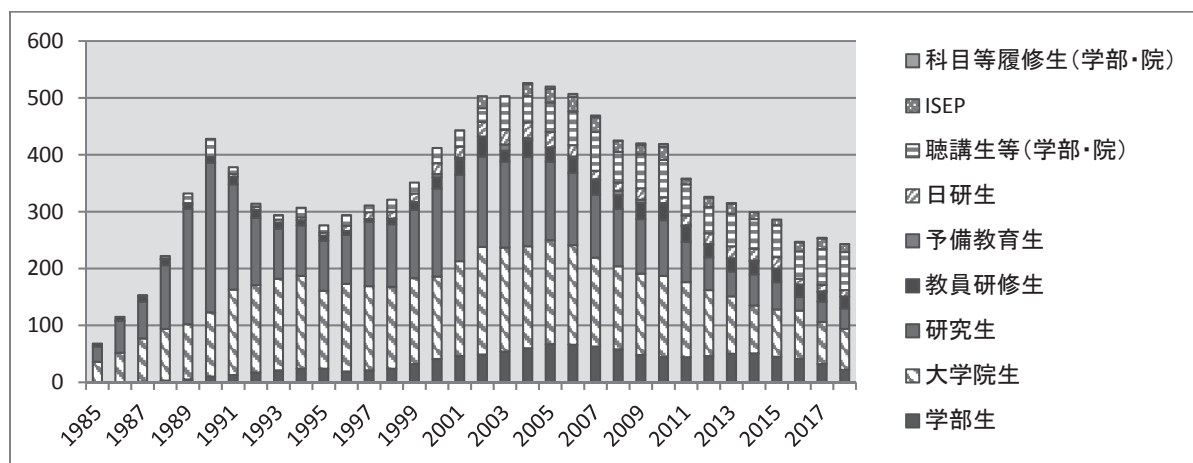


図1 本学の留学種別受入れ留学生数の推移

大学院生・研究生に代わって増えたのは交換留学生の割合である。教員養成系大学である本学は、海外の大学との交流に早くから積極的であったとは言えないが、1995 年にオーストラリア・キャンベラ大学と初の学術・学生交流を締結して以来、2008～2009 年には東アジア教員養成国際コンソーシアムの参加校のうち 7 校（中国・韓国）との間に一挙に学術・学生交流協定が新たに締結されるなど、海外の大学との学生交流は拡大していった。大学間交流協定校は 2018 年 10 月現在 65 校となり、うち 53 校と学生交流協定を結んでいる。また、1995 年に「短期留学推進制度（受入れ・派遣）」が創設されたことを受けて、本学でも、英語による短期留学プログラムの実施について検討を始め、翌 1996 年には学内の教員の協力を得て英語によるオムニバス形式の科目「Japanese Studies」開講を試行した。その後、2001 年後期の試行授業をとまなう予算要求の結果、2002 年秋学期より「短期留学プログラム（ISEP）」第 1 期生を迎えることとなった¹⁵。短期留学プログラム担当の専任教員 1 名の増員も決まり、翌 2003 年に着任した。文部科学省が英語による短期留学プログラムを推進したのは、OECD 諸国からの日本留学を増やし、派遣留学につなげるものであった。本学での短期留学プログラムの実施については、検討段階の初期には英語を母語とする留学生が極端に少なかったため時期尚早という声もあったが、ISEP 科目を活用した学部学生の英語力の向上や派遣留学の増加（とくに英語圏への留学先確保）を視野に入れて実施へと舵を切った。留学生センターの 1 部門だけでなく全学的に運営に関わる（そうでなければ実施不可能な）短期留学プログラムの開始は本学の国際化にとって一つの転換点となったと言えるのではないかと。また、これによって、本学は予備教育受入れ生以外に、日本語入門・初級段階の留学生を迎えることとなり、媒介語となる英語による修学上・生活上の支援体制がこれまでより求められるようになった。

¹⁵ 経緯および試行授業の詳細については、東京学芸大学留学生センター編（2002）を参照されたい。

こうした留学生構成の変化によって、留学生センターによる教育・支援の主たる対象も変わっていった。各研究室が選抜する研究生は、基本的にはそれぞれの指導教員の下で専門領域の研究ができる言語能力を有しているはずである。海外出願の場合は例外的に必要な言語能力を身につけていない状態で来日してしまうケースもあるが、留学の目的はあくまでも専門研究である。それに対して、学部レベルの交換留学生は、その多くが日本語や日本文化を専攻とする学生で、日本語力の向上や日本の文化・社会の理解が留学の主目的である。帰国後の単位互換のために、留学中に履修すべき科目の数や内容について所属校から指導を受けてくる留学生もいる。協定校から派遣される交換留学生が、センターが開講する留学生対象科目の主たる対象になったことで、センターの教育・支援の体制は質量ともに見直しの必要が生じ、2.3 で述べたような変遷に至っている。つまり、本学における留学生の総数はピーク時と比べ半減しているが、留学生センターが提供している教育・支援を必要とする留学生がそれに比例して減っているわけではなく、本学の留学生教育において留学生センターが果たす役割はむしろ大きくなっていると言える。

3.2 留学生と一般学生の交流と派遣留学推進への期待

交換留学生の受入れ拡大にともなって、顕在化してきた課題の一つに、一般学生との接点をどう提供していくか、という問題がある。研究生の場合は、留学生センターでの学習以外に、それぞれの専門分野の教員の指導の下で専門の授業を受けたり研究室で専門を同じくする一般学生との接点を持ったりすることになるが、交換留学生の場合は留学生対象科目の受講が中心となりがちである。一般学生と同等に学部開設科目を受講できるのは一部の上級レベルの学生に限られる。近年、派遣留学の推進が強く求められている状況にあって、一般学生にとっても、学内にいる留学生との接点が海外に目を向けるきっかけとして重要であろうと考えた。しかし、当時、本学の施設・センターは一律に科目開設権を持っていなかったために、他の研究センターとは異なる性質を有する留学生センターも新規に学部の正規科目を開設することができなかった。単位の取れない非正規科目に一般学生を引き込むことは難しい。突破口になったのは、学部のカリキュラム改定で「プロジェクト学習科目」群（「プロジェクト学習」および「総合演習」）が全学の学生を対象に開設されたことである。この「プロジェクト学習科目」¹⁶の担当が認められ、2009年より「プロジェクト学習科目（留学生とともに学ぶ世界のことばと文化）」（春学期2枠、秋学期1枠）を開講し、留学生センターが開講する日本語科目との合同授業という形で、一般学生と留学生との共修授業を開始した。センター教員の授業担当が認められたのは、これらの科目の開設が全学的な取り組みとして展開されていたものだったからであろう。

「プロジェクト学習科目」は2010年度をもって終了してしまったため、留学生センター運営委員会にてアドバイスをいただき、「学芸フロンティア科目」の1枠を得ることができた。「プロジェクト学習科目」のときと同様に留学生センターが開講する日本語科目との合同授業という形で、2011年より再び一般学生と留学生との共修授業を開始した。その後、2.3 で述べたように、学部留学生対象のCA科目と全学留学生対象の「日本研究科目」の見直し、再編にあたって、ようやくセンターの授業開設権が認められ、2015年度より「多文化共修科目」4枠を共通科目に開設することができた。「学芸フロンティア科目」に加えて、一般学生と留学生との協働学習を基本形態とする共修科目が学部の正規

¹⁶ 「プロジェクト学習科目」は当時の小・中学校で強く求められていた「生きる力」を育むことができるような教員の養成を図って2001年度から設けられた科目群である。当初は「プロジェクト学習」（2年次）が基礎・応用各2枠、「総合演習」（3年次）が1枠で計10単位になるという大掛かりなものだったが、2008年度より縮小し2年次計3枠となった。したがって、受講者のうち外国人留学生は科目ごとに異なるが、一般学生は3枠とも同一である（腰越2012参照）。

科目として常置されるようになったことは、センターが意図してきた学生交流にとっても、派遣留学の促進という意味でも大きな前進であったと考える。一方、課外においても、一般学生と留学生との接点を広げるさまざまな試みを行ってきた。「学芸カフェテリア」と連携し、「チャイナ・カフェ」「コリア・カフェ」「欧州カフェ」「国際交流カフェ」など、昼休みの時間帯を使った交流の場を提供している¹⁷。今後も授業や課外の交流を通して留学生を身近な存在として感じ、さらに自分も海外へと目を転じる一般学生が以前にもまして増えることを期待している。

4. 修了留学生とのつながりを目指して

留学生センター発足後のこの20年に限っても、本学に在籍した留学生は延べ8千名を超える。大学の国際化、世界展開力といった言葉を用いなくても、教員養成を旨とする本学にとって、受入れ・派遣、留学期間の長短、在籍時・修了後に関わらず留学生の存在が大きな財産であることに誰しも異論はないだろう。海外であるいは日本国内で、10年、20年前の学生との思いがけない再会を果たし、修了後の活躍を見聞きすることは、私たち教育に従事する者にとって大きな喜びである。本誌に寄稿してくれた修了生のみならず、出会った修了生はみなそれぞれに自分の人生にとって本学で過ごした期間がどのような意味をもつものであったかを、指導教員やキャンパス、寮生活の思い出とともに語ってくれる。そうした修了生とのつながりを保ちたいと、留学生センターでは、修了生データベース構築の試みや、Facebook ページの開設、修了生懇談会の開催などを行なってきた。修了生懇談会はこれまで中国（2008, 2013）・韓国（2009）・タイ（2009）において実施した。特に、2013年に北京で開いた修了留学生懇談会は修了生からの呼びかけを受けて企画したもので、大学の同窓会組織である「辟雍会」と共催して行ない、当時の驚山会長の参加も得た¹⁸。それ以外にも、海外に赴く機会を利用しては修了生との懇親の場をもつよう努めてきた。留学生センターが直接教育・支援に関わる留学生の大半は留学期間1年から1年半で、私たちが個々の留学生と接する時間は短い。だからこそ、10年後、20年後のつながりを目指して密度の高い教育・支援を地道に続けたい。

[参考文献]

- ・文部省編（1992 [H4]）『学制百二十年史』ぎょうせい
（http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318579.htm 最終閲覧 2018 年 11 月 30 日）
- ・東京学芸大学留学生センター編（2002）『東京学芸大学留学生センターの現状と課題～活動報告と自己点検・評価～（1998.4～2002.3）』
- ・教育方法等改善プロジェクト〔代表：竹内誠〕（1990）『研究報告書 留学生に対する日本文化・日本事情の教育に関する研究』
- ・腰越 滋（2012）「東京学芸大学「プロジェクト学習科目・総合演習」の意味と価値についての一試論—学力・能力観の変容に関連させて—」地域と連携する大学教育研究会編『地域に学ぶ、学生が変わる—大学と市民でつくる持続可能な社会—』第9章，pp. 241-258，東京学芸大学出版会
- ・東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会編（1999）『東京学芸大学五十年史 通史編』東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会
- ・谷部弘子（1993）「大学における日本語教育—東京学芸大学の現状と課題から—」『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』第44集，69-80
（文責：谷部 弘子）

¹⁷ 課外活動の詳細については9章参照。

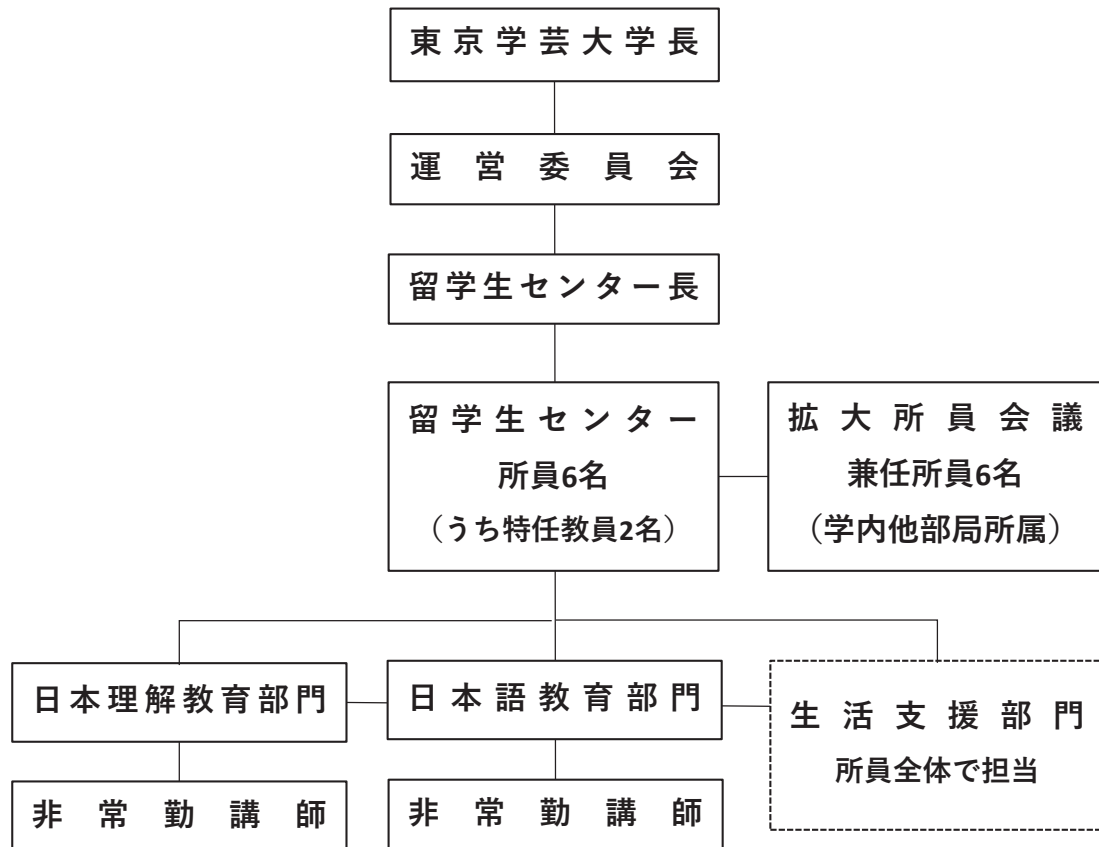
¹⁸ 『辟雍』第10号（辟雍会設立10周年記念号）「北京に中国留学生大集合」（報告・写真：遠藤満雄）参照。

1. 留学生センターの概要と20年の歩み

留学生センター 年表（主なできごと）

元号	西暦	本学および留学生センターの主なできごと	留学生数 (5/1 現在)	留学生数 (10/1 現在)	関連する国内外の主なできごと
S54	1979				日本語・日本文化研修留学生制度創設
S55	1980		16	16	教員研修留学生制度創設
S56	1981	第1回「留学生との懇談会」開催（学長主催）	10	10	
S57	1982		13	13	
S58	1983		24	24	「21世紀への留学生政策に関する提言」（留学生10万人受入計画）発表 「日本語能力試験」実施開始
S59	1984		45	45	「21世紀への留学生政策の展開について」発表 留学生担当の専門教育教官の配置開始 「日本語能力試験」海外実施開始
S60	1985	教員研修生受入れ開始 日本語・日本事情教育開始	68	68	
S61	1986	学生部学生課に留学生係を設置 学生部に留学生相談室を開設	115	115	
S62	1987	留学生担当教官（日本語・日本事情担当教官1名、専門教育教官1名）配置 学部留学生入学開始	136	153	
S63	1988	教養系課程設置 日本語日本文化研修生受入れ開始	196	222	第1回日本語教育能力検定試験実施
S64/H1	1989		273	332	天安門事件（中国） ベルリンの壁崩壊（ドイツ）
H2	1990	外国人研究生受け入れ方法の改正	404	428	「出入国管理及び難民認定法」改正 国立大学において「国立学校設置法施行規則」に基づく「留学生センター」の設置開始
H3	1991		371	378	
H4	1992	日本語・日本事情担当教官3名、専門教育教官5名となる	303	314	
H5	1993	留学生教育研究センター（学内施設）設置 国際交流会館完成	289	294	日本語指導が必要な外国人児童生徒、1万人を超える
H6	1994		298	307	「短期交換留学生受入れ支援制度」
H7	1995	初の大学間交流協定締結（豪・キャンベラ大学）	272	276	阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件 「短期留学推進制度（受入れ・派遣）」の創設（←「短期交換留学生受入れ支援制度」） 英語による短期留学プログラム開始
H8	1996	大学院博士課程（連合学校教育学研究科）発足	279	294	
H9	1997	夜間大学院（総合教育開発専攻）設置	293	311	
H10	1998	留学生センター（日本語教育部門、留学生指導部門、専門基礎教育部門）、省令施設（学内共同教育研究施設）として設置 留学生課設置 日本語研修コース実施要領制定 日本語予備教育開始 第18回学長主催留学生懇談会開催	299	321	
H11	1999		333	351	
H12	2000		381	412	
H13	2001	留学生の生活状況に関するアンケート調査実施	420	443	アメリカ同時多発テロ事件
H14	2002	短期留学プログラム（ISEP）実施要領制定 ISEP第1期開始	428	503	FIFAワールドカップ・日韓大会開催 日本留学試験実施開始
H15	2003	留学生センター規程改正：「専門基礎教育部門」を「専門基礎教育部門及び短期留学プログラム部門」に改める	503		留学生受入れ10万人突破 SARSがアジアを中心に世界的に流行
H16	2004	国立大学法人 東京学芸大学設置	474	526	新潟県中越地震 「独立行政法人日本学生支援機構」設立
H17	2005	「留学生専門教育教官」ポスト廃止 協定校留学説明会を開催（ヨテポリ大学、北京師範大学）	500	520	「長期海外留学支援」開始
H18	2006	ソウル市立大学サマープログラム実施	477	507	総務省、多文化共生推進プログラムを提出
H19	2007	ソウル市立大学サマープログラム実施 協定校留学説明会開催（香港中文大学）	464	469	
H20	2008	「能」公演＜初めて観る能の世界＞を国際教育教室と共催（塩津哲生氏・塩津圭介氏ほか） 中国・北京にて修了留学生ネットワーク構築に関する意見交換および懇談会を開催 教職大学院（教育実践創成専攻）設置 協定校留学説明会開催（ハワイ大学ヒロ校）	405	425	「留学生30万人計画」 「短期外国人留学生支援制度」開始（←「短期留学推進制度（受入れ）」）
H21	2009	韓国・ソウルにて修了留学生懇談会を開催 タイ・バンコクにて修了留学生懇談会を開催 講演会「北米留学のすすめ」開催	363	420	「留学生交流支援制度（短期受入れ・短期派遣）」開始（←「短期外国人留学生支援制度」「短期留学推進制度（派遣）」） 「プログラム校」の支援開始 「留学生交流支援制度（長期派遣）」開始 国際化拠点整備事業（グローバル30）開始
H22	2010	留学生センター規程改正：「留学生指導部門、専門基礎教育部門及び短期留学プログラム部門」を「日本理解教育部門」及び「生活支援部門」に改める 留学生専門教育教員ポスト消滅 国立大学法人東京学芸大学役員会の下に国際戦略推進本部を置く	397	419	「就学」ビザ廃止→「留学」ビザに統合
H23	2011		337	358	東日本大震災 「ショートステイ・ショートビジット」プログラムを開始 「大学の世界展開力強化事業」開始
H24	2012		324	326	
H25	2013	国際交流委員会廃止 中国・北京にて修了留学生懇談会を開催（辟雍会と共催）	286	315	戦略的な留学生交流の推進に関する検討会（文科省） 「ショートステイ・ショートビジット」プログラムを廃止（短期受入れ・短期派遣については留学支援期間を8日以上1年以内とする） 「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略」（文部科学省）
H26	2014	センター長の選任手続改正（「運営委員会の推薦に基づき、専任の教授から学長が任命する。」→「理事又は教授（副学長を含む。）から学長が指名する。」）	289	299	「海外留学支援制度（短期派遣・短期受入れ）」開始 「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」開始 「スーパーグローバル大学創成支援」開始
H27	2015	「世界の成長を取り込むための留学生の受入れとグローバル人材の養成－TGU International Student Step Up Program－」（TGU ISSUPプロジェクト）開始 「多文化共修科目A～D」を学部教養科目として開設	275	286	
H28	2016	キャンパスアジア・プログラム開始	253	247	熊本地震
H29	2017		233	254	
H30	2018	大学間交流協定校：学生交流54校となる 短期留学プログラム（ISEP）の名称が留学生教育プログラム（ISEP）に変更	232	243	
H31	2019	シラバコーン大学「7+1プログラム」開始			

留学生センター運営組織 (平成30年度)



留学生センターは、現在6名（うち2名の特任教員を含む）のスタッフが3部門にわたり外国人留学生に対する日本語教育と日本理解教育、日本人学生との共修授業及び国際交流事業を進めており、修学上及び生活上の指導・助言等を行うとともに、外国人留学生教育の在り方についての研究を行っています。

[センター教員]

センター長……………加賀美 雅弘
 教授……………岡 智之
 教授……………許 夏玲
 准教授……………有澤 知乃
 准教授……………小西 円
 特任教授……………谷部 弘子
 特任准教授……………伊能 裕晃

[事務スタッフ]

短期留学係長……………佐藤 久美子
 事務補佐員……………真鍋 法子

2. 歴代センター長からのメッセージ

留学生センター設立20周年記念によせて

加藤 清方（名誉教授）

第1代センター長 1998～2002

センター設立20周年を迎え、まずはおめでとうございます。他大学の留学生センターが改組や統廃合される状況下で、学芸大のセンターが20年も存続できたことは良くも悪くも学芸大の教職員・学生の熱意があったからこそに他ならないと思います。

外国人留学生の受け皿が極めて脆弱であるとの認識から、東京大学に初の留学生センターが設立されその運営に携わり、電気通信大学在職時には留学生センターを招致、その直後に学芸大に移りセンター不要論を排しセンターを招致、役不足と自認しつつも初代センター長を拝命、翌年、東京で初のセンターの建物施設予算を獲得そして竣工、最初の2年間は多くの方々の協力もあり施設・ハードウェア整備など、多忙を極めました。センター長2期目には、運営体制を整備・拡充、諸事故処理（留学生の措置入院2件と入院諸手続き、本人との面会、本国の大使館・保護者への各国語による諸連絡、成田への送迎、etc.）など、指導教員一個人の力だけではどうにもならず、病院・警察関係者や教職員・学生協力者など多くの力を結集、幸い大事には至らず、無事、難局を乗り越えることができ、ソフト面での強化を痛感しました。また、そのときほど起点としての留学生センターの重要性を認識したこともありませんでした。

学生の措置入院事件の後キャンパスを歩いていると、見知らぬ留学生が近寄ってきて、「先生、〇〇を助けてくれてありがとう」とつたない日本語でお礼を言われたことが当方にとって何よりのご褒美でした。学生はちゃんと見ているのですね。措置入院した本人は、学芸大卒業後も、中等教育の教員として元気に頑張っているようです。当方が定年退職後も、本人の母国で会うことができ安堵しました。

個人は社会に内在するいろいろな葛藤を反映して生きています。個人の異変は、個々人の生活上の制約、競争原理、社会制度上の制限など、さまざまな矛盾の中に深い根を持つものです。それは留学生だけではなくすべての学生を含めたわれわれ自身の問題です。われわれは、日々、異常を内在させて生きているのかも知れません。ふつうの人は、たまたま、それが表現されないだけなのかも知れません。正常とは異常と同じくらい不可解なものだということ、健常者が生活者であるのと同じく、異常者もまた生活者であり人間なのだということを痛感した留学生センターの4年間でした。

センターが、教職員とともに外国人留学生に寄り添い、彼我の学生、地域社会との連携をサポートする場として、さらに活性化されることを祈っています。



大学のグローバル化に向けた留学生センターの活動への期待

長谷川 正（副学長）

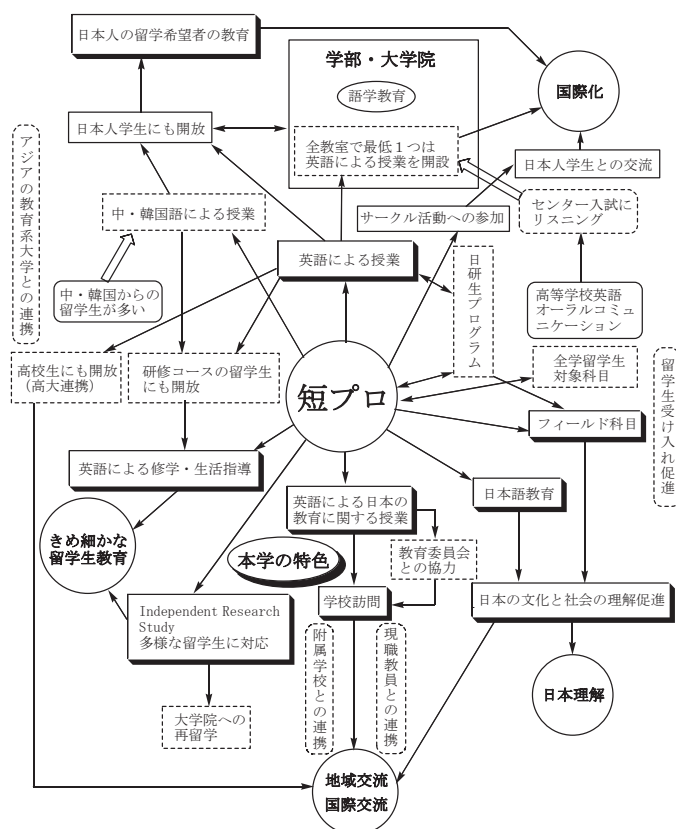
第2代センター長 2002～2004

ちょっと古い話ですが、1983 年5月に当時の中曽根首相がアセアン諸国を歴訪したときに親日家を作る必要性を感じたことが因となり、同年8月に21 世紀の初頭までに留学生受け入れ数を10 万人にするという「留学生10 万人計画」が発表されました。私がセンター長を務めていました2002 年度からの2年間は、この計画が完成した時期で、本学の留学生が500 名を超えていました。2002 年秋学期には本学の短期留学プログラム（ISEP）も始まり、19名の留学生を受け入れました。ISEP のカリキュラムは「講義科目」、「フィールド科目」、「個別研究学習」からなり、日本語教育科目以外の「講義科目」は英語で行われ、当時としては、科目構成と授業内容が他大学にない特色あるものでした。

当時関わった学内プロジェクト「短期留学プログラムの促進による大学教育の国際化と知の連携」の報告書（2003）があり見てみますと、現在でも参考になりそうなものがあります。この報告書に載っている図を右に示しました。

アジアの教育系大学との連携は、2016 年から本学と北京師範大学とソウル教育大学校との間でキャンパスアジア事業の取り組みが始まり、修士課程のダブルディグリープログラムとして新しい学生交流が実現しました。また、英語による授業を学部で行うのは簡単なことではありませんが、今年度生物教室の1 科目が英語で行われ、来年度からは大学院修士課程次世代日本型教育システム研究開発専攻の授業が英語で行われます。ISEP 導入の効果が実現してきていると思います。大学入試センター試験が2020 年度から変わり TOEFL 等も導入されますので、本学での英語による授業も増えてくるでしょう。大学での英語による授業は、小学校英語が教科化されますので、質の高い教員養成を推進するでしょう。これからの学校教員にはグローバルな視点も不可欠ですので、教員養成段階での短期間の留学も意義があります。派遣留学生を増やすには、協定校の開拓と受入れ留学生を増やす必要があります。

留学生と日本人学生との交流は、留学希望の学生を増やし、大学のグローバル化を推進するのにも役立ちます。留学生教育と交流事業に取り組み、派遣留学生の指導にも力を入れてきている留学生センターの大学のグローバル化に向けた更なる活動に期待しています。



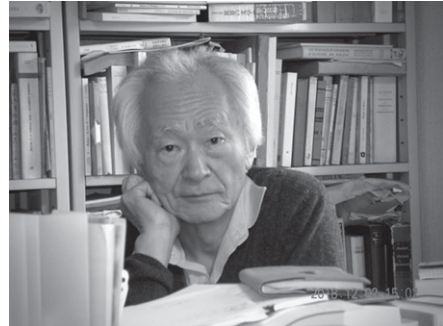
短期留学プログラムが促進し始めている教育効果の全体像

聞くはいつときの恥、聞かぬは末代の恥

大矢 タカヤス（名誉教授）

第3代センター長 2004～2006

国会でしどろもどろになって汗をふいている大臣の姿をテレビで見ると、なんとなく留学生センター長時代の自分が思い出されてしまう。幸いにして学芸大学には国会質疑はなかったが、右も左もわからぬ部署の一番上に突然放り上げられたのは同じである。自分から引き受けたくせに、と言われそうだが、実は以前に一度鷺山学長から附属小学校長を打診され、（引き受けたら、今はもうやらないが、立小便もできなくなると）必死になって断り、恐らくかつて同じ教室の同輩のよしみから好意で提案してくれた学長は少し気を悪くして「この次は絶対やってもらうからね」と言っていたので、留学生センター長の話がきたときは観念したのである。



当初、センター長というからにはセンターのことは隅々まで把握して何事であっても的確に処理できなければならない、という誤った幻想にとらわれていた私は毎日戦々恐々として過ごした。次々に来る用件、書類はどれもこれも数独とかパズルのように一人では対応できるものではない。私は人にもものを頼むのがあまり得意な方ではないのだが、この時ばかりは「聞くは一時的恥、聞かぬは・・・」を徹底的に実行した。ただ、専任教員のうち私と同世代で一番質問しやすいはずの日向茂男さんは癌のために入院中だったので、はるかに年下で、もはや異世代に属している若い教員たちの部屋を図々しくノックして回った。特に谷部弘子さんの部屋は1日に数回訪れることもごく普通で、同じ学科の独仏の同僚教員でもこれほど頻繁に顔を合わせることに決まらなかった。要するに専任教員がセンター長のお守りをしていたようなもので、ここから私の持論、センター長は専任教員が輪番で務めるべし、が生まれる。確かに雑用を処理させ、行事の際の挨拶、不祥事出来の場合の記者会見、場合によっては詰腹を斬らせる役がいれば重宝であるが、センターの機能の迅速化、専任教員の負担などを考えればマイナス面は大きい。外部の視点を取り入れてタコツボ化を避けるという建前はあるだろうが、これは兼任教員の参加する会議などを活性化すれば済む。ただ留学生センターの教員は留学生対応業務と日本語教育の両方をこなさなければならないので、長になると並みの学科主任よりもはるかに負担が重くなる。その点は任期中の授業を全面的に免除するなどの配慮が必要だろう。在任中に時々洩らしていたが、誰にも聞いてもらえなかった私の提言である。

かくして、この素人センター長は、少なくとも初めの半年間は、おんぶに抱っここの状態で通常の業務をこなした。ただ任期中には通常ならざる事態も幾度か起き、ない知恵を絞らざるをえなかった。そのひとつは、上記の日向さんが亡くなられたことである。ご自宅にお悔やみに伺ったり、センター主催で「偲ぶ会」を開いたりした。余談であるが、ご長男にその際は故人の愛したお酒を用意すると公言してしまい、それが「十四代」とかいとうんでもなく高価な日本酒だったので調達に苦労したことは鮮明に記憶している。この欠員を埋める後任採用人事はすぐに始められたが、こちらは外国語講座で公募の責任者としてひどい苦労したばかりだったので、手順は知っていた。ただ、模擬授業をやるというのは私にとって初めての経験だったので、他のスタッフといろいろ相談しながらなんとか切り抜けた。これも余談だが、ある候補者の授業中に生徒役の専任教員の一人が極めて自然にトンチンカンな質問をしたので、あとで皆から演技ではなかったのではないかと疑われ、懸命に弁明していたのはおかしかった。

前任のセンター長が学内の重要ポストに就任するために1期2年でお辞めになる前は2期やるのが普通だったらしいが、私は1年やって能力・気力の限界を感じ、1期で辞めさせてもらった。

留学生センター創立20周年、おめでとうございます

片山 舒康（名誉教授）

第4代センター長 2006～2008

センターの歴史のちょうど半ばにあたる2006年4月から2008年3月まで留学生センター長に在任しました。当時の手帳を見ると、この時期には学内の委員会委員のほか文科省を始め学外のいくつかの委員を兼任しており、さらに学会の事務局長も引き受けていたのです。いま考えるとよく身体が持ったものだと思います。在任中の出来事の思い出は多々ありますが、特に印象に残ったことを記します。

2006年11月に日本学生支援機構（JASSO）が企画した留学生フェア（タイ国チェンマイとバンコク）に島田国際課課長とともに参加しました（行事写真 p.93）。チェンマイではティティソーンさん、バンコクではパニタンさんという留学修了生がブースでの通訳をしてくれました。残念ながら教育系大学への留学希望者は少なく、また日本への留学は奨学金の受給が前提という学生が多くを占めていましたので、このイベントに参加しても本学への私費留学生の増加は見込み薄という印象を受けました。バンコクでは本学の交流協定校である Silpakom 大学に Wanchai 助教授を訪ね、交流促進について話し合う機会を得ました。

また同じ頃、東欧から来ていた日本語研修留学生の就学態度が問題となりました。大学にほとんど出でこずアルバイトに専念しているようでしたので面談を繰り返しましたが、結局、留学中止という判断を下さざるを得ませんでした。母国の大学での激しい選抜競争を勝ち抜いて留学したのに、残念だと思いました。交換留学生の中にも時々このような状態になったり、あるいは精神的に病んだりするケースがあるようです。生活環境の激変や言葉の壁の影響が大きいのかもしれません。

2008年の3月には、本学の交流協定校である北京師範大学を谷部弘子センター専任教授、交流コーディネーター松岡榮志教授・佐藤正光教授とともに訪問し、本学と北京師範大学との更なる交流促進を北京師範大学の留学担当者と話し合いました。さらに、中国の留学修了生との意見交換会・懇親会をおこないました。この会には北京市以外からも元留学生が参加してくれて、その場で中国留学修了生同窓会の結成が約束されました（行事写真 p.93）。留学修了生ネットワーク構築が留学生センターの2007年度事業計画の一つでしたので、この意見交換会の成功はその事業の進展のよいきっかけになったと思います。その後、他の国の留学修了生にネットワーク構築を働きかけましたが、現在はどうのような状況なのでしょう？留学修了生どうしあるいは留学修了生と本学とのネットワークが広がっていることを期待しています。

私がセンター長在任の頃には、本学の外国人留学生数は五百前後でした。その留学生全員に留学生センターが関わっていたわけではありませんが、留学生の受け入れに果たす留学生センターの役割は非常に大きいものだと感じました。今後も多数の外国人が本学に留学してくると思いますので、留学生センターの機能がさらに充実していくことを祈念しています。



留学生も日本人学生もお互いにともに学ぶことができるコミュニティを

渋谷 英章（総合教育科学系教授）

第5代センター長 2008～2012

今から40年近く前、大学での最初の職務として国費教員研修留学生プログラムの立ち上げにかかわり、その後、留学生政策の分析や帰国後のフォローアップ調査などを行い、留学生教育は私にとって研究テーマのひとつとなっていた。比較教育学を専門分野として学芸大に着任してからも、少なからぬ数の留学生とつきあう機会にめぐまれ、彼らから多くのことを学んだ。ただしこの間、日本の大学では、その本分はあくまでも「日本人」学生の教育であると考えられ、留学生は「+α」にすぎない、あるいは「お客さん」とされる傾向があるのではないかという疑問が常に頭の中にあった。このような考えに対して、私の研究室でのゼミや授業では、参加する留学生の日本語能力が十分でなくても、可能な限りのコミュニケーションを行う中で、留学生も日本人も同じ学生としてともに学びあうことができるように心がけていた。「〇〇国からの留学生△△さん」ではなく「クラスメートの△△さんは〇〇の出身だ」（△△さんは同じ学生のひとりであり、〇〇の出身であるが〇〇国を代表しているのではない）と、私も学生たちも自然に考えるようになっていった。



学芸大に勤務して十数年が経ち、留学生センター長を務めることになった。それまで、国際交流委員会委員として、また ISEP での「Education in Japan」の授業担当として、あるいは個々の留学生の指導教員として留学生教育にかかわってきていたものの、今度は組織運営に携わることとなり、留学生センターの先生方それぞれの考え方をはじめ、留学生対象の授業のカリキュラムや生活指導・相談などの業務の状況など、最初の1年間は留学生センターの状況を理解することに費やされた。そのなかで、留学生のそれぞれの立場によって留学生センターに期待される役割がさまざまであること、留学生センターが行っている業務が大学全体の教員にはあまり知られていないこと、さらに留学生センターのプログラムに所属して学ぶ留学生は日本人学生と交流する機会が限られているのではないかということなどを認識するようになった。それとともに、大学での日常生活を通して、留学生であるか日本人学生であるかにはこだわらずに、同じ世代の学生として自分たちの共通性を認識しながら、それぞれの文化や歴史、言語などの違いをお互いに学ぶことができるような環境醸成が求められているのではないかという思いを強くした。留学生に対して日本語の教育を提供するという留学生センターの当初の目的は変わらないものの、留学生との日本人学生の交流の機会を通じて、留学生が日本人学生を媒介として日本社会を理解するとともに、日本人学生にとって自分の視野を広げる活動にも留学生センターとしてかかわる必要性を考えるようになった。結果として、小さな取り組みではあったが、センターの先生方のアイデアをもとに、留学生と日本人学生の交流合宿や共修授業などを充実させることができた。

また、留学生センターにかかわることでセンターの先生方とともに活動できたことは、私にとってありがたい機会であった。バンコクでの同窓会の会合や民間財団の助成を受けた調査訪問でいっしょに東南アジア諸国を訪問した際などに、学芸大で学んだ帰国留学生からセンターで日本語を勉強した当時の思い出を聞きながら、留学生センターの貴重な足跡を認識することができた。そして、センター長の任を離れた後も、留学生と日本人学生との共修授業と一緒に取り組むなど、この関係は続いた。

留学生センター長としての4年間は、留学生教育を実践する組織の運営に携わるという貴重な経験を私に与えてくれた。このことに感謝しつつ……。

留学生センター20周年によせて

椿 真智子（人文社会科学系教授）

第6代センター長 2012～2016

大学が高度な教育・研究の拠点となるべきことはもちろんですが、加えて本学は、優れた学校教員や教育人材養成という使命を担っています。教員養成というドメスティックな枠組みにおいても今や、グローバルな視点をもって多元的価値を理解し行動できる人材が求められることは疑う余地ありません。私自身、2012～2015年度の4年間、留学生センターに関わらせていただき、留学生やさまざまな経験の中で再認識したことの第一は、異なる立場・視点にたった見方・考え方および直接対話の重要性と困難さ、そしてつきることのない可能性でした。当時、国際戦略推進本部では、本学の重要戦略に位置づけられてこなかった国際化をどうはかるべきか、そして既に減少傾向にあった留学生数を増加させる方策について、かなりの時間を割いて議論しました。同時に私自身がより深刻な問題と感じていたことが2点ありました。1点目は、300名弱の受入れ留学生数に対し、学生交流協定を結ぶ



50の海外協定校へ派遣される本学学生が毎年40名前後にとどまっていたことでした。そのうち教養系の学部生が約7割を占め、教育系は極めて少ない人数でした。2点目は、全国の教員養成系大学の中ではとびぬけて多い留学生が在籍するのにもかかわらず、留学生と一般学生との交流・対話が希薄な点でした。当時留学生の内訳は、大学院レベルが162名と全体の約57%を占め、出身国・地域別では中国が全体の約55%と多くを占めていましたが、トータルでは40弱の国・地域に及び、文化的多様性は極めて大きいものがありました。多くの留学生は修了後、母国の教育現場や国内外で活躍しており、その人的資源は本学にとり大変貴重ですが、修了生との継続的関係もまた難しい問題でした。もちろんこうした課題に対し、当センターの先生方が日々尽力され多大な貢献を続けてこられたことは言うまでもなく、私も多くを学ばせていただきました。先生方との議論をとおして、留学生と一般学生とがともに学ぶ「多文化共修科目」の開設が実現し、学内では短期留学プログラムの開発・実践が少しずつ広がっていきました。

留学生センターが核となる極めて充実した日本語教育、留学生の学習・研究支援、留学生と一般学生との相互理解・協働を促す取り組みは、地道ではあれ国家の枠組みを超越した相互理解の基礎固めに大きく寄与するものです。大学全体としても2016年度よりキャンパス・アジア・プログラムがスタートし、2019年度から北京師範大学・ソウル教育大学とのダブル・ディグリー制が導入されるなど、国際交流の取り組みは近年大きく前進しつつあります。国内外で自国・自己中心主義が蔓延し、不寛容性が正当化され、排除の論理がまかり通る中であって、当センターを中心に、多様性を学び理解し共感することの意味・意義を一層多くの学生・教職員が共有できることを今後も期待しております。

留学生センターの活動を讃えて

赤司 英一郎（人文社会科学系教授）

第7代センター長 2016～2018

わたしは2016年4月から2018年3月まで留学生センター長を務めました。N講義棟2階にあるセンター長室はとても広く、東壁面と南壁面がガラス窓になっているので、昼間にブラインドを開けると、四季をとおして、まばゆいほど明るい光が部屋に射し込みます。その明るい光のなかで知った留学生センターの活動は、プレースメントテストで幕を開ける緻密に構成された日本語教育と日本理解教育から、日本文化の見学・体験学習、学校訪問、国際交流合宿、防災学習、各種講演会にいたるまで多岐にわたり、まさに目覚ましいものでした。



外国人留学生にとって、日本滞在は、わくわく胸を躍らせるものであると同時に、無事に元気にやってゆけるだろうか、友人ができるだろうかといった不安もいっぱいの中に始まるにちがいありません。そうした心配を和らげ、展望をもって勉学に取り組むことができるように留学生をリードする役割を、留学生センターの先生方は、これまで見事に果してこられました。

司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズの『肥前の諸街道』という、歴史的にも地理的にも壮大なスケールの事象に言及した本を読むと、九州の福岡から唐津、平戸をへて横瀬、長崎へと続く海岸線が、百済への援軍を出した白村江の戦いの頃から、蒙古襲来の鎌倉時代をへて、大航海時代のキリスト教伝来と長崎出島におけるオランダとの交易にいたるまで、日本という島国が外国と接する窓口というか、最前線であったことがよくわかるのですが、学芸大学にそれを当て嵌めると、さしずめN講義棟2階の留学生センターとS講義棟3階の国際課をむすぶ線が、その海岸線となっているようです。むろん本学の教員は研究においてそれぞれ思い思いに国境を越えておられるでしょうが、本学が全体として海外と接している最前線は、この一帯です。

交易であれ、戦いであれ、学問であれ、最前線のリアリティを見失ってしまうと、理解が机上の空論になってしまう恐れがあります。それゆえ、たとえば文献においては原典にあたり、それが外国語のばあいには原語で読むことが求められるのは当然のことです。その意味で、毎年新しい留学生たちと直に接する留学生センターは、きわめて重要な機関にして場所ということになります。

ところで、教員養成系大学における教育はドメスティックに完結しうる、といった囁きをたまに耳にすることがあります。しかし、今日の社会のグローバル化を持ち出すまでもなく、小学校から高校にいたる教育内容もまた、普遍的な学問との結びつきやそれとの対決を見失ったら根本的に成立しえないでしょうから、そして上記の最前線のリアリティはいかなる事柄や場面にあっても欠かせないものですから、本学においても、留学生への教育および彼らとの意見交換、本学学生と留学生との交流、本学学生の海外の大学への送り出しは、とても重要な、これからいっそう大切にしていかななくてはならないテーマにして課題であるのは明らかだと思われます。

留学生センターの先生方はこれまでたくさんの功績を積み重ねてこられました。それらの土台の上に留学生センターが今後さらに大きく発展されることを心から願っています。

3. 留学生プログラムの紹介

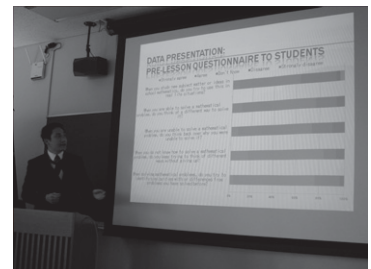
教員研修留学生研修プログラム

1. プログラムの概要

「教員研修留学生」制度は、5年以上の経験を有する初等・中等学校教員及び教育関係機関の専門職員に、教育経営・教育方法及び専門教科に関して日本での留学機会を与える制度である。教員研修留学生（以下、教研生）が日本の大学の教員養成学部において18か月間の研修を行い、その成果を帰国後に本国で生かしてもらうということが本制度の目的である。

「教員研修留学生」制度が創設された1980年以来、本学では1985年から例年10数名の教研生を受け入れている。留学生センターが設置される前は専門研究を行う教研生のみを受け入れていたが、設置されてからは日本語予備教育を行う教研生も受け入れるようになり、受け入れの人数は年々増えてきている。2003年には最多20名を受け入れたことがある。

教研生の専門の研究はそれぞれ所属の研究室にて行うが、日本語の運用能力を身につけずに来日した場合は、初めの1学期間、留学生センターの日本語コースにて1週間11コマ×15週間の集中コースを受講する。プログラムの研修内容は、専門教育、個人研究、日本語及び日本理解の教育、特別演習、見学実習の5つの領域によって構成される。2010年10月に入学した教研生から、各自の研究成果を公表し、活発に意見交換ができるように、研修終了時に研究報告発表会（右写真）の開催を再開し、また2015年10月から渋谷英章教授（学校教育分野）の協力より「基礎共通セミナー」を開設したことなど、本プログラムでは研修の効果を高めるために様々な工夫に取り組んだ。しかし、人員の減少による業務量の増加、経費の都合による非常勤の雇用困難など、諸事情により、2017年10月からセミナーの担当を留学生センターの専任教員が引き継ぎ、セミナーの趣旨に沿いながら「教研生特別演習」という名称に変更した。特別演習のほか、教研生は日本語科目及び指定された日本理解に関する科目を履修の上、各指導教員のもとで専門教育を受けながら、本人の希望するテーマで研究を取り組み、研修終了時までにはその成果をレポートにまとめる。それは報告書として刊行される。また、プログラムの期間中は多様多彩な課外の体験学習、学校見学、実習なども行われる。2008年から交流を始め、毎年12月頃に行われる本学の附属竹早小学校との交流会はその一行事である。



以下、直近の5年の教研生の受入状況を示す。

2014年10月～2016年3月

9名（韓国3、フィリピン2、スペイン1、タイ1、インドネシア1、ベナン1）

2015年10月～2017年3月

14名（韓国3、中国2、インドネシア2、タイ1、ソロモン島1、キルギス1、クロアチア1、セルビア1、ガーナ1、ケンヤ1）

2016年10月～2018年3月

8名（韓国4、インドネシア1、クロアチア1、ガボン1、マラウイ1）

2017 年 10 月～2019 年 3 月

8 名（スウェーデン 1、フィリピン 1、中国 1、韓国 1、タイ 1、ナイジェリア 1、ウズベキスタン 1、インドネシア 1）

2018 年 10 月～2020 年 3 月

13 名（韓国 6、アルゼンチン 2、タイ 1、インドネシア 1、クロアチア 1、ジンバブエ 1、ナイジェリア 1）

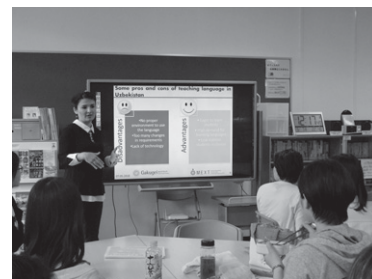


2. プログラムの特色

プログラムの期間中、教研生は多様な科目を選択できる。例えば、日本の文化社会及び教育への理解を高めるための「日本理解 A～H（春学期 A C E G、秋学期 B D F H）」、日本人学生と一緒に履修できる「多文化共修科目 A～D（春学期 A C、秋学期 B D）」、英語による「留学生教育プログラム[前短期留学プログラム]（ISEP）講義科目・フィールド科目」、初級入門～上級日本語科目が提供されている。

そして、2015 年秋学期より入学直後の教研生対象の特別演習が週 1 回開講され、来日後の初めの 1 学期間、教研生は全員揃って同じ教室で学校教育、日本語及び日本文化をテーマにした英語の講義を受け、各自の母国の学校教育事情等に関するプレゼンテーションで意見交換やディスカッションを行ってきた。また、研修期間中、本学の附属小中学校（左写真）及び近隣地域の学校との交流授業、授業見学等が年に数回行われる。

前述のように、教研生は、母国で小中高学校の教師、または学校行政に携わっている教育専門家であり、研修期間中に個々の教育関連の研究テーマに取り組むことを目的に来日する。教研生という貴重な人材資源を活かし、本学の日本人学生との国際交流を図るため、2014 年 4 月より「海外の学校教育事情」と題したカフェ講座（右写真）を研修生の協力を得て実施した。週 1 回昼休みの時間帯に教研生が母国の社会と文化、教育制度、キャリア経験談について語り、日本人の学部生、留学生、職員との交流を図る。



カフェ講座の終了後に、参加者を対象にアンケートを実施した。以下、アンケートの主な回答から要点をまとめた。

- ・ 海外の教育は面白い点があって、ベテランの先生方の教授法も勉強になる。
- ・ 韓国などのよく知っている国だけでなく、マラウイなどのあまり知らない国についても知れたのでよかった。
- ・ 普段こういう機会がないので、色々な国の教育について知ることができてよかった。
- ・ 英語が話せるようになりたい。色々な国の人の話が聞けてよかった。
- ・ The Gakugei Café Talk is a great opportunity for teacher training students to share some information about their countries, school education systems and what it takes to be teachers in their countries. It is also an opportunity to interact and make friends with Japanese students.

3. 行事・年間スケジュール

2017 年 10 月入学のプログラムの行事・年間スケジュールは、以下の通りである。

2017

Oct 3 (Tue)	Orientation I
Oct18 (Wed)	Beginning of semester
Oct18 (Wed) 3 rd period	Seminar: Japanese Language and Culture
Oct 25 (Wed)	Visit to Life Safety Learning Centre at Tachikawa
Nov 8 (Wed) 3 rd period	Seminar: On Making the Presentation Materials and the Research Report
Nov 15 or Nov 22(Wed)	Workshop of Japanese cakes
Nov 29 (Wed)	Visit to Kawagoe
Dec 13 (Wed)	Visit to Affiliated Takehaya Elementary School
Dec 20 (Wed) 3 rd period	Seminar: Presentation on My Country's Education and My Career

2018

Jan 10 (Wed) 3 rd period	Seminar: Presentation on My Country's Education and My Career
Jan 31 (Wed)	Visit to Yukiza at Koganei
Feb 11 (Sun)	Visit to Grand Sumo Tournament
Feb 13 (Tue)	End of semester
Feb 14 (Wed) 3 rd period	Seminar: Presentation on My Country's Education and My Career
	Spring holidays

April 5 (Thu)	Orientation II
April 12 (Thu)	Classes start
June 13 (Wed)	Visit to National Theatre for Kabuki Lecture
Oct 18 (Thu)	The beginning of semester
Dec 28 (Fri)	The last school day before winter holiday

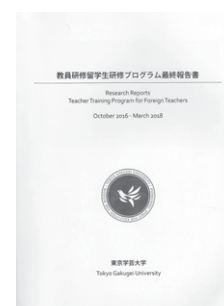
2019

Jan 4 (Fri)	The beginning of school day
Feb 18 (Mon)	Closing date for submission of research report
Feb 27 (Wed)	Presentation of research report & The closing ceremony



4. 直近の研究レポートのタイトル

- 日本の「問題解決授業」を用いた数学教育—中学二年生対象の「数当てゲーム」—
(2018 年, 韓国)
- Art-based activities in teaching French as a foreign language in Croatia and Japan
(2018 年, クロアチア)
- A comparative analysis of a prestigious and key role position in school
administration in Gabon and in Japan: School Principalship
(2018 年, ガボン)
- Analysis of Development and Use of Integrated Low-Cost Science
Instruction Materials and Methodology and Their Implementation in Japanese Schools
(2018 年, マラウイ)
- Comparative Study of Art Lesson at School in Tokyo, Japan (2018 年, インドネシア)
- タイ中等教育段階の初級日本語クラスにおける PBL の提案—21 世紀型スキルの育成を目指した—
(2017 年, タイ)
- 日本の外国人児童生徒に対する支援体制—小学校を中心に— (2017 年, 韓国)
- Preliminary Analysis on Education: China & Japan (2017 年, 中国)
- Sustaining Rural Schools: A Comparative Case Study of Solomon Islands and Japan
(2017 年, ソロモン島)
- A Comparative Study into the Duties of the Elementary School Teacher in Japan and Ghana
(2017 年, ガーナ)
- A Comparative Study on EFL Policies and Practices in Serbia and Japan' s Primary and
Secondary Education (2017 年, セルビア)



(『教員研修留学生研修プログラム最終報告書』より抜粋)

(文責：許 夏玲)

日本語・日本文化研修留学生プログラム

1. プログラムの歩みと概要

1979年に創設された文部科学省国費外国人留学生制度である日本語・日本文化研修生（以下、「日研生」）の本学における受入れは1988年に始まり、この30年間に本学で学んだ日研生は420名を超える。帰国後、今度は国費研究留学生制度に申請し、再度本学に入学した学生も少なくない。受入当初は数名単位の配置であったが、1997年（センター発足の前年）より10名を超え、2004年にはこれまでの最多となる28名が配置されている。2004年は本学の留学生数が最多となった年でもある。その後、年によって増減はあるものの、大使館推薦・大学推薦合わせて20名前後の配置が続いていたが、2016年度より再び10名前後の配置に転じている。2016年度の配置数の減少は本学のみならず他の日研生受入れ大学においても同様であり、日研生採用数自体が前年より大きく減少したことに拠る。文科省の担当者によれば、2016年以前の2、3年の日研生採用数がむしろ多かったためであり、今後採用数が大幅に増加することは見込めないようだ¹。日研生受入れを希望する大学も増えており、現時点では今後本学への配置数が20名前後にもどることはあまり期待できないだろう。

受入れ当初と比べ、受入れ体制も変わった。留学生センター発足以降、日研生プログラムは留学生センターが受け入れ母体となって、日本語教育部門がプログラム全体のコーディネートを担当している。全学の教員にも依頼していた指導教員も、2007年からはセンターの専任教員が分担して全日研生の指導に当たる体制を取ることにした。日研生には研修の成果の一つとして研究レポートの提出および発表を課しているため、個人研究の指導について指導教員間で連携をとりやすくしようと考えての変更であるが、一方で、この頃には ISEP 生を含む学部レベルの特別聴講生が増加しており、特別聴講生の指導依頼は「教室」に、日研生の指導はセンターにと役割分担がなされていったとも言える。

プログラムは、大きく以下の6分野から構成されている。

- (1) 日本語科目（選択科目：各自の日本語力に合わせて受講）
- (2) 日本理解に関する科目
（選択必修科目：「日本理解」8科目、「多文化共修科目」4科目より最低2科目を受講）
- (3) 日研生特別演習（必修科目：秋学期・春学期各1科目）
- (4) 専門研究
- (5) 個人研究（研究レポートを提出）
- (6) 文化交流

研修生には、プログラムの修了要件として、上記の必修科目、選択必修科目を含む14科目を履修すること、研究レポートを期限までに提出することが課されている。

日研生受入れ初期・中期の頃は、このプログラムで初めての来日を果たす、という学生がほとんどであった。が、最近は2回目、3回目の来日という学生が例外的な存在ではなくなった。それ以前の来日経験は、他大学への交換留学や職業研修のほか、1ヶ月未満の短期研修、観光旅行、公演・コンサート鑑賞ツアーなどさまざまであるが、来日経験がなくても、自国での出会いやインターネットを介して来日前にすでに人的関係を築いている学生もあり、日本への関心の持ち方も情報量も非常に多様になってきている。このような変化に対して、上記(2)の日本理解に関する科目の再編等を行なっ

¹ 泉・文部科学省学生・留学生課留学生交流室専門官の発言による（「日研生は2016年では323人採用しております。（中略）もともと日研生自体がおおよそ300人から400人ぐらいで推移していたところですので、この2、3年がむしろ多かったとご理解いただければと思います。今後、去年のようにまた500人、600人単位で採用されますかと問われれば難しいと考えております」『平成28年度日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議録』p.10）。

てきているが、今後の研修内容全体や指導のあり方の検討に際しては、来日する日研生の背景やプログラム修了後の進路などについて基礎的な情報を収集し理解を深めることが欠かせない。日研生の留学目的や成果が個別化してきている一方で、日本に対する関心を媒介にさまざまな国から集まった学生たちが1年間の留学生活を送ることの意義について次のような共通の理解があることは、本学が日研究生を受入れることの意義でもあるだろう―「私たちはこのように一緒に住んで、一緒に授業を受けて、一緒に遊ぶことができたということの凄さと大切さを甘く見てはいけません。それはなぜかというと、他の国の人を受け入れるということは現在の世界を見ればかなり難しそうなものに見えるからです。私たちはたくさんの時間を一緒に過ごしたため、世界の色々な国について学び、人の多様性もわかってきました。その色々な国と人に対する意識を高めてきたので、世界の裏側に起こっていることは距離的にいくら離れていても、人の心と心のきずながあるからこそ、「その問題は自分のでもある」のように思い始めた人もいます。私たちが無意識にやってきた行動はつまり交流です。交流をして他の人を理解できるようになることや、他の国や人のことを知ることはとても大事なことだと思います。簡単なことだと思われるかもしれませんが、本当は、私たちは誰でも得られるわけでない特権を得たと思います」(2015年度日研究生・修了式挨拶より)。

2. プログラムの特色²

本学の日研究生プログラムは、必修科目(「日研究生特別演習Ⅰ・Ⅱ」)、選択必修科目(日本理解に関する科目と学部学生との協働学習を目指した「多文化共修科目」から2科目以上を選択)のほか、日本語科目や専門科目を自由に選択する構成になっている。日研生の多様な学習背景に鑑み、各自の日本語力、興味・関心に基づいて適切な学習計画が立てられるよう自由度を高くしているのが特徴である。

必修科目の「日研究生特別演習Ⅰ」は「附属小学校との合同授業、体験・見学などを通して、日本の社会や文化に関する理解を深め、日本語の運用能力を身につける」ことを目的としている。具体的には、学内の施設や教員、小金井市地域、市外の近隣地域施設の協力を得ながら、学習内容を構成している。

構成要素の一つは学内にある附属小金井小学校との交流である。これは、小学校側からの要望で始まったもので、単発の見学ではなく2回あるいは3回と同じ小学4年生のグループと継続して双方向の交流を行うのが特徴と言える。1回目は留学生から、2回目は小学生からそれぞれ自分の出身地や地域の文化についてポスター発表などを行っている。この附属小金井小学校はじめとする附属小学校との交流が基になって、2010年、2011年には学内の「総合的道德教育プログラムの開発」に参画し、小学校中・高学年向けの国際理解のための教材として学習シートやDVD、Webサイトを作成した³。

「日研究生特別演習」の二つ目の構成要素は、小金井市内の施設や地域の方々である。例えば、市内にある和菓子屋さんに教えていただく「和菓子ワークショップ」、江戸時代から続く糸あやつり人形劇団「結城座」での講座と操作体験、小金井公園内にある「江戸東京たてもの園」での市民ボランティアによる正月行事体験、学外インタビュー活動などがあげられる。こうした地域交流は、他授業での地域住民や施設へのインタビュー活動の経験など、もともとは担当の各教員が個々に作ってきた関係がもたれているが、最近は市の関係部局や「観光まちおこし協会」といったところからも外国の

² プログラムの特色については「平成28年度日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議」において発表し、その内容を1ページにまとめた「「日研究生特別演習」における学校・地域との交流-東京学芸大学-」(文責:谷部弘子)が『会議録』に掲載された。本節は、その原稿に加筆修正を加えたものである。

³ 谷部弘子・島田めぐみ・赤司英一郎・川崎誠司(2011)「国際理解のための教材開発-留学生を通して知る世界のことばと文化-」

方にももっと小金井市のことを知ってもらいたいというアプローチが来ている。2017 年、2018 年の「結城座ワークショップ」は小金井市コミュニティ文化課による「江戸文化体験事業」の一環である。これまで教員個人が築いてきた地域交流が組織間でつながりを深めることができるように、また担当者が変わっても経験や情報を蓄積していけるようにしていき、今後さらに地域密着型の文化理解活動につなげていければと考えている。

3. 行事・年間スケジュール

以下に例として 2017-2018 年度の日研生プログラムのスケジュールを示す。

- 10 月上旬：渡日
- 10 月：開講式、オリエンテーション、秋学期授業開始、防災館見学
- 11 月：江戸東京たてもの園見学、工場見学
- 12 月：附属小学校との交流、和菓子ワークショップ
- 1 月：附属小学校との交流、江戸写し絵ワークショップ
- 2 月：都立高校との交流
- 4 月：春学期授業開始
- 5 月：農園ツアー、講演会参加、図書館セミナー
- 6 月：歌舞伎鑑賞
- 7 月：レポート提出
- 8 月：研究発表会、修了式
- 8 月下旬：帰国



4. 研究レポートのタイトルの例

- ・アニメと現実の日本社会との比較ー恋愛における三角関係ー（2018 年、ドイツ）
- ・食生活における栄養バランスに対する日本人若者の意識（2018 年、ベトナム）
- ・西洋と日本における昔話の精神分析の比較ー「手なし娘」を事例にー（2018 年、ウクライナ）
- ・日本におけるごみの分別・資源化と削減ー東久留米市と京都市を例にー（2017 年、インドネシア）
- ・助言の場に用いられる表現ー日本語母語話者とタイ人日本語学習者を中心にー（2017 年、タイ）
- ・ゲームに現れる役割語の翻訳上の問題（2017 年、スウェーデン）
- ・日本語における助詞の省略と日本語母語話者と日本語学習者の意識と理解（2016 年、フランス）
- ・あいづちにおける「うん」の機能ー日常会話を中心にしてー（2016 年、ウズベキスタン）
- ・在日留学生の就職に対する意識調査（2016 年、ミャンマー）



「留学生を通して知る世界のことばと文化」Web サイト



『研修レポート集』

（文責：小西 円・谷部 弘子）

一般交換留学プログラム（交換留学生・特別聴講学生）

1. 大学間交流協定の開始と経緯

本学に受入れている「交換留学生」の根拠は「東京学芸大学学則第 47 条及び東京学芸大学大学院学則第 40 条に定める特別聴講学生」であり、最初の大学間交流協定（学生交流）は 1995 年 3 月 24 日キャンベラ大学との間に締結された。

キャンベラ大学との学生交流は、学生交流が締結される以前にも本学からは 1983 年から毎年 1 名ずつ、海外派遣留学生制度により留学がなされていた。当時派遣された学生はすべて中学校教員養成課程英語専攻の学生であり、キャンベラ大学からは、大学間交流協定が締結された翌 1996 年から毎年 1 名ずつを受け入れていたが、彼らの専攻は日本研究または日本語教育の学生であった。

キャンベラ大学と同じく 1995 年 6 月に大学間交流協定（学生交流）を締結したのが北京師範大学と新羅大学校であった。北京師範大学からは 2000 年に最初の交換留学生 1 名を受け入れており、本学からは 2003 年になって 2 名、2004 年にも 2 名の学生を派遣した。新羅大学校からは 1995 年に最初の交換留学生を 1 名受入れ、以降交換留学生の枠数が 5 名でスタートしたため、毎年 4～5 名を受入れてきた。

交流協定（学生交流）締結年と締結協定校名は 2018 年 12 月現在、下記のとおりである。大学名の後の②、③等は協定締結当時の交流学生の枠数である。取消し線付の大学は、派遣と受入のバランスが不均衡、学生・学術交流実績がない、連絡が途絶える等により更新を取り止めた協定校である。

交流協定 締 結 年	協定校名
1995 年	キャンベラ大学②、北京師範大学⑤、新羅大学校③
1996 年	カーセジ大学②、東北師範大学②
1997 年	西シドニー大学②、トリア大学第Ⅱ学部⑤、東洋言語文化大学（INALCO）②、 全南大学校②
1998 年	ボールステイト大学②、公州大学校③、ソウル市立大学校⑤、ラジャバト大学プラナコン校 （タイ）①、
1999 年	ハイデルベルク大学⑤、蘇州大学⑤、香港中文大学③
2000 年	ヨテボリ大学⑤、シラパコーン大学②、タマサート大学②
2002 年	ハワイ大学ヒロ校②、華東師範大学②、国立台湾大学④、京畿大学校②
2003 年	広西師範大学⑤、上海師範大学⑤、ソウル教育大学校⑤
2004 年	忠南大学校①
2005 年	エアランゲン大学ニュルンベルク③、台湾師範大学①、韓国教員大学校②
2006 年	ダルエスサラーム大学（タンザニア）②、フィリピン教育大学②、インドネシア教育大学②
2007 年	イースタンミシガン大学②、レスター大学②
2008 年	ハンプルク大学アジア・アフリカ研究所②、国立台中教育大学②、京仁教育大学校②
2009 年	ビクトリア大学②、ウメオ大学教養学部②、湖南師範大学②、南京師範大学②、 華中師範大学②、清州教育大学校①、済州大学校②
2013 年	チアパス州立芸術科学大学（メキシコ）②
2014 年	ヤギェヴォ大学（ポーランド）②、ソウル大学校師範大学②
2015 年	カンタベリー大学（ニュージーランド）⑤、コンケン大学（タイ）②、 ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学③
2016 年	オルレアン大学②、パリ・ディドロ大学②、北京外国語大学②、 ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学③
2017 年	グルノーブル・アルプ大学②
2018 年	アスワン大学（エジプト）②

2. 交換留学生（「ISEP 生」、「一般プログラム生」）の現在

2.1 学習のプログラム

学習については、法務省「上陸許可基準適合性」省令基準の第3号「申請人が専ら聴講による教育を受ける研究生又は聴講生として教育を受ける場合は、教育機関の入学の許可を受け、かつ当該教育機関において一週間につき10時間（600分）以上聴講をすること」を根拠として、本学の授業時数に換算し、1週間に7科目以上を履修するよう指導している。

交換留学生は現在、年間におよそ30校の協定大学から80名程度を受入れており、①「主に英語による科目により日本文化等を学ぶ留学生教育プログラム（ISEP）生」と、②「主に日本語科目や（日本語で開講される）学部科目・大学院科目等を学ぶ留学生」（ISEPと区別するため「一般プログラム生」と称する）に分けられる。

①のISEP生は年間10名前後の受入れであるが、中には日本語能力の高い学生もあり、1学期にISEP科目を決められた単位数取得すれば、それ以外は日本語科目でも学部開設科目でも、授業担当教員の許可があれば履修可能としている。ISEP生は通常1年間（2学期）のプログラムであり、1年間指導教員の下で自分のテーマを持って研究し、その成果を「Individual Study」として英語により発表する。人数は少ないものの、半期の学生も受け入れている。

②「一般プログラム生」（年間60～70名程度の受入れ）については、週に10時間以上の学習を指導しているが、特に履修内容に取り決めはなく、日本語科目のみでも、ISEP科目の履修でも制限はない。日本語能力に応じて授業担当教員の許可があれば学部や大学院の科目を履修する学生も多い。留学期間終了後の研究発表等も現在のところ課してはいない。

2.2 宿舎について

留学生数は2002～2006年にかけて、総数が500名を超えていた。2004年度で見るとそのうち交換留学生は67名（12.7%）であったが、交換留学生のピーク時は2010年の89名（21.2%）であった。協定校は年々増えているため、2018年度で見ると、総数243名のうち81名（33.3%）を占めるまでになり、割合では2004年の3倍近くにもなっている。本学ではプログラムごとに宿舎を割り当てているため、80名強の交換留学生を一括して入寮させるための寮がなく、現在本学で管理している2つの寮の空室に入居させるとなると、例えば小金井市の国際交流会館におよそ10名程度、東久留米市の国際学生宿舎に20名程度と分散して入居せざるを得ないため、一括して全員を小平市の一橋大学国際学生宿舎に入寮させてもらっている。これ以上数が増えた場合、例えば奨学金受給者のみを空室のある遠くの寮に入寮させる等の方策を考えざるを得ない。一橋大学国際学生宿舎では、多摩地区の一橋大学（留学生の外日本人学生も居住）、電気通信大学、東京農工大学、東京学芸大学の4大学の留学生が合同で生活している。他大学の留学生との交流も活発で満足度は高いものの、それ以外の日本人学生との交流の場が少ないという声もある。

2.3 奨学金

交換留学生は非正規生であるため、これを対象とする奨学金はJASSO（日本学生支援機構）の「海外留学支援制度」（月額80,000円）による以外になく、2018年12月現在、本学では①「大学の世界展開力強化事業（28キャンパス・アジアA②プログラム）（北京師範大学、ソウル教育大学校、東京学芸大学の3大学が対象、略称：CA、2名程度）」、②「アジアの教員のグローバルな力量向上に向けた双方向学生交流プログラム（略称：アジア教員、17名）」、③「東京学芸大学日欧学生交流プログラム—グローバル化に伴う教員・教育支援者養成—（略称：日欧学生交流、22名）」、④「東京学芸大学

留学生教育プログラム Tokyo Gakugei University International Student Education Program (TGUISEP)、略称：ISEP、14名)の4件のみである。④ISEPと③日欧学生交流を除けば2件の枠でアジアからの留学生全員が奨学金をもらえることはなく、奨学金の選考は毎回頭を悩ませる部分である。現在アメリカを対象としたプログラムはない。

2.4 指導教員

交換留学生の受入れにあたっては、留学生の専門・希望分野を鑑み、指導教員を各教室で推薦していただき指導を依頼している。忙しい中教員に留学生指導等をお願いすることになるが、研究室によっては留学生を一員として迎え、研究室の学生とも研究や交流を深め日本語能力も向上し、帰国後も訪問し合うなど双方にとって有益な、将来に繋がる交流に発展する場合もある。履修については日本語能力に応じて指導教員の科目の学習やゼミに参加するケースが多く、効果を挙げている例がある。本学に限ったことではないが受け入れる側に多少の温度差があるのが実情である。チューター制度もあり、留学生が希望すれば指導教員がチューターを推薦することも可能であり、国際課でチューター希望の日本人学生とマッチングをするケースもある。

2.5 日本人学生との交流

交換留学生はほぼすべての学生が日本人学生との交流を望んでおり、さまざまな機会を得て交流している。交流の中でも「サークルに入る」というケースが多い。体育会系(テコンドー、柔道、剣道、水泳、サッカーなど)はもちろん、文科系サークル(邦楽研究会、スイーツ研究会、ラテンアメリカ研究会、アニメ研究会など)に加入している例がある。個人的に友人が欲しいという場合も含め、チューター制度があるが、特にチューターを決めなくても、その国から帰国してきた派遣留学生が自然と新しく渡日した同国の留学生のケアをするパターンが多く、ある種のコミュニティが作られていることがある。授業を通じての交流(共修科目等)も少しずつ増えているので、今後も多様な機会が増えていくように事業等を設定したい。

2.6 生活支援

生活支援の面では、交換留学生は全員一橋大学国際学生宿舎に住んでいるため、RA (Resident Assistant)の果たす役割がかなり大きい。4大学から推薦されたRA (30名)は組織として日々活動を行い、フロアごとにRA (必ずしも本学の学生とは限らない)が配置され、留学生も「フロアの一員」という意識が芽生えていることが多いが、一斉に行動することに苦手意識を持つ学生も一定数いる。特に一般生は人数が多く、あまり国際課にも顔を見せない留学生もおり、それぞれストレスや心的な影響で体調を崩したりするケースがあるが、その場合は国際課職員や留学生センター教員、保健管理センター、学生相談室等が連携を取って掬い上げることができるよう、まずは情報共有等に努めていく必要がある。

(文責：国際課短期留学係)

International Student Education Program (ISEP)

留学生教育プログラム

1. プログラムの概要

2002 年度より、日本学生支援機構(JASSO)の「海外留学支援制度」の認定を受けて始まったプログラムであり、履修生には上記機構から奨学金が付与される。英語を主な教授言語とし、多様な専門分野と国際的な修学環境のもとで教育や異文化理解へのアプローチを主体としながら、グローバル社会ならびに多文化社会で活躍できる人材を育成することを目的としている。受入れ学生の多くは、本学の海外交流協定校で主に教育学やアジア・日本研究を専攻しているほか、英語や英語教育を副専攻としている交換留学生であるが、国際関係論、メディア学、文化人類学、言語学、環境教育学、音楽教育等の幅広い専門分野の学生がこれまで本プログラムに参加してきた。参加学生の多様な専門性を活かし、学際的な環境下で相互に学びを深めることが可能なプログラムとなっている。

プログラムの運営は、国際戦略推進本部の下にある留学プログラム実施部会にて行なわれている。(2012 年度までは、国際交流員会の下にある短期留学プログラム部会にて運営されていた。) 同部会では、総合教育科学系・人文社会科学系・自然科学系・芸術スポーツ科学系の各学系よりそれぞれ 2～3 名の教員が 2 年間の任期で部会委員を務め、留学生センター長が部会長として全体の統括を行っている。なお、留学生センターの ISEP 担当教員が、同部会委員(任期無し)として実質的なコーディネイト業務を担っている。なお 2018 年度に、旧プログラム名称の International Student Exchange Program (短期留学プログラム) から International Student Education Program (留学生教育プログラム) と変更し、より一層、教育学の分野に力を入れたプログラムとなっている。

2. プログラムの特色

教員養成基幹校である特色を活かし、比較教育や異文化理解教育の学習を核としつつ、総合的に教育にフォーカスした人文社会・自然科学・芸術スポーツ系の科目 (ISEP 科目) を各学系の教員が英語で提供している。なお ISEP 科目は年間 27 科目開設しているが (2018 年度)、その内 7 科目が学部生との共修科目として開講されており、2019 年度には 10 科目に拡大予定である (「7 章 開設授業一覧」参照)。これら日本人学生との共修科目は、留学生の日本理解の促進のみならず、日本人学生の英語力強化及び異文化理解や海外留学の動機付けともなっている。

ISEP 科目の履修に加えて、探求的学習を目的とした Individual Study (個人研究)を通して、専門分野の指導教員のもとで各自の専門に応じたテーマについて知見を深め、英文による 10 ページ程度の研究レポートの作成後、研究発表会を行いプログラムの集大成としている。なお留学生センターの担当教員による ISEP Seminar (演習, 2011 より開講)では、Individual Study への取り組みを中心としつつ、学校訪問や文化施設の見学のほかワークショップやセミナー等を実施し多面的な日本理解・国際理解を促進している。また、それぞれの日本語レベルに応じた日本語科目 (文法・会話・講読等) や日本理解科目 (教育・人文社会・自然科学・芸術スポーツ) 及び多文化共修科目 (世界の言語や異文化理解等) の履修も可能となっている。

参加学生は、母校では学ぶことのできない日本の教育ならびに学校現場への理解を深めつつ、専門科目の学習や実地体験などを通して、それぞれの専門性を磨くことが可能である。英語を教授言語とした授業を中心に構成しつつ日本語による科目も提供することで、言語の習得レベルに限定されず欧米やアジアの幅広い交流協定校からの学生が参加することを可能にし、世界から見た日本の教育と教育に付随する様々な問題に関する多面的な学びが得られるのが特色である。

3. これまでに受け入れた学生の主な所属大学

国	大学
中国（香港）	北京師範大学, 上海師範大学, 南京師範大学, 蘇州大学, 香港中文大学
台湾	国立台湾大学, 国立台中教育大学
韓国	全南大学校, 公州大学校, ソウル市立大学校
タイ	シラパコーン大学, タマサート大学
フィリピン	フィリピン教育大学
メキシコ	チアパス州立芸術科学大学
ドイツ	ハイデルベルク大学, トリア大学
フランス	国立東洋言語文化大学 (INALCO) , パリ・ディドロ大学
スウェーデン	ヨテボリ大学
オーストラリア	西シドニー大学, ヴィクトリア大学
アメリカ	ボールステイト大学, カーセージ大学, イースタン・ミシガン大学 ハワイ大学ヒロ校

4. 行事・年間スケジュール

以下に例として 2016～2017 年度の ISEP プログラムの年間スケジュールを示す（主に個人研究への取り組みや、交流・体験・見学など）。

- 10 月：開講式、オリエンテーション、秋学期授業開始
Academic Plan（授業履修計画）提出
- 11 月：Individual Study への取り組み（テーマの検討）
江戸糸あやつり人形体験（結城座）
上野下町民俗博物館見学と周辺のフィールドワーク
- 12 月：Individual Study への取り組み（研究方法の検討）
附属竹早小学校学校「留学生交流会」
歌舞伎ワークショップ（前進座）
木目込み人形製作体験（真多呂人形会館）
- 1 月：Individual Study 研究計画の発表
- 2 月：Individual Study 研究計画書の提出
- 4 月：春学期授業開始、Academic Plan（授業履修計画）の提出
Individual Study への取り組み（調査方法の確認）
- 5 月：Individual Study への取り組み（調査の実施）
セミナー「シリアに生きる人々、シリアと共に生きる人々の今」Muhanad Aslan 氏
武蔵御嶽神社酉年式年大祭における蔵王権現開帳拝観, および御岳山散策
日光東照宮例大祭見学および周辺のフィールドワーク
- 6 月：Individual Study への取り組み（調査の結果報告）
- 7 月：Individual Study への取り組み（研究レポートの完成）
- 8 月：Individual Study 研究発表会、閉講式

上記のほか、これまでに実施した交流・体験・見学の例は以下の通りである。なお ISEP 生以外の留学生も対象として行った行事は「9 章 事業紹介」に一覧として示した。

- ・ 東京都立武蔵高等学校附属中学校での英語の授業にゲストとして参加
- ・ 茶道体験（裏千家 高橋梨津子氏）

- ・ 漫画ワークショップ（漫画家学会）
- ・ 江戸東京博物館見学
- ・ 歌舞伎鑑賞（歌舞伎座）
- ・ 宝塚歌劇鑑賞（東京宝塚劇場）
- ・ 朝日新聞社見学



個人研究発表会（2013 年）



都立武蔵高校附属中学校(2016 年)

5. 個人研究レポートの例

レポート題目	所属大学（国）	修了年度
An Ideal <i>Hokenshitsu</i> from Elementary School Student's Point of View	国立台湾大学（台湾）	2012
Descriptive Research on the Early Childhood Education of Japan and Philippines	フィリピン教育大学（フィリピン）	2013
Comparison between Japanese and Thai People's Images on the Flood in Thailand	シラパコーン大学（タイ）	2013
Design Project: 3 in 1	ヨテボリ大学（スウェーデン）	2013
Comparison of Foreign Language Education between America and Japan in Secondary School	ハワイ大学ヒロ校（アメリカ）	2013
How Has Social Media Influenced Fandom in Japan?	香港中文大学（中国[香港]）	2017
Half or Double? The Roles and Perceptions of Mixed-Heritage Peoples in Contemporary Japan	西シドニー大学（オーストラリア）	2017
<i>Shokuiku</i> : Food Education in Japanese Schools	ハイデルベルク大学（ドイツ）	2018
The LGBT Community in Japan	トリア大学（ドイツ）	2018
Promotion of Japanese Culture Abroad: Japan's Soft Power	ヤギェウォ大学（ポーランド）	2018

（文責：有澤 知乃）

4. 協定校の教員からのメッセージ

20年近くにわたる交換協定

永野 マドセン 泰子

スウェーデン・ヨテボリ大学

言語文学学科日本語セクション・教授

留学生センター設立 20 周年、誠におめでとうございます。貴学とヨテボリ大学が交換協定を結んでから、もう 20 年近くなるということでもあり感無量です。

この間、本当にたくさんの学生を受け入れていただき、また貴学からは優秀な学生さん達を送っていただけてきました。数においても質においても、貴学との学生交流は当方にとってもっとも成功しているケースと言えます。センター長をはじめ留学生センターの先生方、また事務の方々に心よりお礼申しあげます。学生交換をはじめた当初はお互いにまだ手探りの状態で、1 年目は布団のレンタルについて事務の方と当方の学生のあいだを取り持ち、7 月だけで確か 70 通のメールを交換した記憶があります。3 名ではじめた交換協定でしたがすぐに 5 名に増員となりました。また通常の交換留学生に加えて、日研生も毎年のように受け入れていただけてきました。さらにここ数年は国費による研究留学生を受け入れていただくことも多くなり、先だっては初めて修士課程を正式に卒業した学生が生まれました。日本においても、スウェーデンにおいても大学の機能や役割が多様化し激しく変容する時代となり、留学する学生の目的やその後の進路も多様化しております。これからも貴学とヨテボリ大学の交換協定がさらに発展し、たくさんの卒業生が両国、いや世界中で活躍してくれることを願ってやみません。これからもヨテボリ大学をよろしくお願いします。

留学生センター設立 20 周年記念に寄せて

ワンチャイ・シラパッタクン

タイ・シラパコーン大学

文学部日本語学科・助教授

東京学芸大学留学生センター設立 20 周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

ご設立当時から現在に至るまで、近年の留学生受け入れ政策の方針などにより、留学生を取り巻く環境は大きく変化を遂げてきたかと存じます。その中で、貴センターの存在は多くの留学生の心のよりどころとなっていたことでしょう。

本学から貴学に留学した多くの学生も貴センターのご支援のもと、日本で充実した留学生活を送ることができていることと存じます。また、派遣側の私達も貴センターの存在で安心して学生をお送りできております。両親のもとを離れた留学生たちのサポートをしていただいておりますこと、ただただ感謝しております。

貴センターの今後のご発展、貴センターから再び世界へ飛び立つ学生がさまざまな国や分野で活躍され、また日本と世界を繋ぐ友好の架け橋になることを心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉と致します。

東京学芸大学留学生センター設立20周年記念に寄せて

ワン ヤン

アメリカ・カーセージ大学
現代外国語学部日本語学科・准教授

私がカーセージ大学に入ったのは2008年でした。当時、現代言語学科の先生方が東京学芸大学との1996年以来の交流プログラムについて誇らしげに紹介してくれたこと、今でも覚えています。

カーセージ大学はウィスコンシン州にある小さいリベラルアーツの私立大学で、短期留学の学生参加率が全米で4位にランクされています。しかし、日本での交換留学の協定大学は長年東京学芸大学しかなかったのです。

毎年カーセージから3名ほどの学生を東京学芸に送り出し、東京学芸から1、2名の留学生を迎えています。東京学芸で留学を終えて帰ってきた学生は、みな日本語力が急速に上達しただけでなく、日本文化に対する理解力もポップカルチャーにとどまらず一回り深くなりました。その上、東京学芸のご推薦を通して、ここ数年 MEXT（日本文部科学省奨学金）をもらった学生が4人もいました。この貴重な機会に恵まれ、東京学芸大学の指導教員のもとで日本語研究の力も育てられた Andrew Igl さんは、「自分の人生を変えた」「一生忘れられない」と感激した気持ちを表していました。学生の成長した姿を見て、私は本当にうれしくて、東京学芸の留学プログラムに感謝したいです。

カーセージでは日本文化への情熱に溢れた日本語科の学生は、教室外でも文化祭などいろいろなイベントや活動で活躍しています。東京学芸からの留学生は日本語クラブのメンバー、チューター、ルームメイト、また友達として、自然にこのカーセージの日本語コミュニティに溶け込み、貢献してくれました。帰国してからもカーセージの学生と頻繁に連絡を取り続けています。ときどき日本で就職したカーセージ卒業生と、東京学芸元留学生との日本での再会の写真をフェイスブックで見ます。彼らの国境を超えた友情は長く続いていくと思います。

学生時代の留学経験は、一人一人の学生の人生ばかりでなく、カーセージと東京学芸両校のキャンパスの環境と雰囲気、また、大きく言えば、日米の両国の国民の異文化への理解と納得にも大きな影響を与えるのではないかと私は信じています。

ここに東京学芸大学留学生センターの皆さまの長年のご支援に感謝し、センター設立20周年のお祝いを申し上げます。

忘れがたき東京学芸大学との30年間

林 洪

中国・北京師範大学

外国語文学学院日本語学部・准教授

東京学芸大学留学生センター20周年、おめでとうございます！

北京師範大学の林洪です。1986～1987年北京日本学研究センターで松岡榮志先生に教わった際、はじめて、東京学芸大学という大学名を知りました。1992年、本学90周年のイベントにいらっしゃった東京学芸大学蓮見学長の通訳を務めさせていただきました。天安門のお城の上までご案内させていただいたことも昨日のように思えます。蓮見学長のご来訪がきっかけとなり、両大学間の正式な交流が始まったのです。その結果の一つとして、1994年1月～1995年7月、客員研究員として、松岡先生の研究室で研修させていただきました。

その時、松岡先生の研究室では、主に多言語多文化の研究でしたが、せっかく日本語教育研究室のある東京学芸大学に来たからと思って、谷部弘子先生、加藤清方先生、林明子先生など諸先生の日本語教育に関する授業を聞かせていただきました。研修の成果として、2編の論文を発表しました。それが私にとって、日本語教育とその研究の始まりだと思います。その後、両大学間の学生レベルの交流がますます盛んになってきました。今も、毎年、わたしの所属している日本語学部や、本学の他の学部などの長期・短期の留学生を受け入れていただいています。

2005年の10月からは、両大学間の教師交換のプロジェクトが始まって、今も続いています。留学生センターの谷部弘子先生、岡智之先生にもそれぞれ半年日本語学部で、日本語を教えていただきました。そして、2009年に発足した北京師範大学外文学院日本語教育教學研究所では、とくに二年に一度の **classroom teaching** に関するシンポジウムとワークショップの開催に関して、多大なご指導とご支援をいただいております。

2016年3月、松岡榮志先生、齋藤ひろみ先生、橋本美保先生をはじめとする先生方のご指導のもとで東京学芸大学の博士号を取得しました。博士号の取得後、出張が一層多くなってきました。日本語教育の再出発への道のりではないかと思います。

末筆となりましたが、日本語を楽しめ、お互いに心と心とのふれあいのできる留学生センターが輝き続けることを願ってやみません。



松岡先生、私と 90 年代研修時にお世話になった中庭さん

5. 修了生からのメッセージ

たいへん勉強になった学芸大

ゼイヤエ（ミャンマー）

2002～2005 年度 国費研究留学生・大学院

こんにちは。ゼイヤエと申します。

2002 年から 2006 年まで美術教育を学び、大学院も修了したものです。指導教員は西洋美術科の金子徹先生です。

日本に美術専攻として留学することは、ミャンマーでは 40 年ぐらいの間に自分が初めてであり、知らないことばかりを日本で習いました。特に美術教育や Education psychology や美術に関する科目などです。大変勉強になって、国に戻ってから元の美術大学の教師をやる時もいろいろ役に立ちました。大学の中でも、その時美術で大学院を終えた人は自分一人しかいなかったのも、とても大変でした。その時は軍人時代なので今よりもっと大変でした。でも、自分なりに学生たちのためいろいろな活動をしたので、学生たちが喜んでくれたのが今も思い出に残っています。それから美術学校の学長に異動させられて、そこでも 1 年間働きました。2009 年にいろいろな理由で仕事をやめまして、自分のプライベートの美術学校やギャラリーを開きました。今は学生が 100 人くらいいて、卒業生は 1000 人くらいになりました。



今ミャンマーは Democracy の国になって昔と変わっていろいろ変化しています。その中に教育と美術もあります。前はミャンマーの学校教育には美術の授業がなく、教科書もありませんでした。

今は学校教育に美術と音楽の授業を入れまして、東京学芸大学の卒業生である自分と Aung Si Thu Hlaing という方が小学校から高校までの教科書を教育者の方々と作っています。今は小学校 3 年生までと高校 2 年生までが終わりました。これからも残る学年を続けて作るつもりです。また、元の National University of Arts and Culture, Yangon は去年初めての絵画の大学院を始め、自分がそのための教育委員の一人になって、様々なアドバイスをしています。そして院生たちにも美術教育や現代美術のことを教えています。

ちょっと長くなりましたので、ここで終わりたいと思います。学芸大学は自分にとって大きな贈り物、宝物でした。これからもよろしくお願いします。

学芸大で知識を向上させるかたわら、友情関係を築く

ハイルン アル ラシド（インドネシア）

2015 年度 日本語日本文化研修プログラム

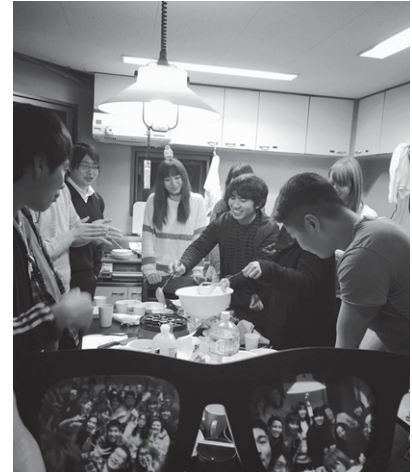
私の名前はハイルン アル ラシドです。インドネシア共和国のメダン市出身で、母国にある日本大使館の推薦で日本語日本文化研修生（日研生）として約 1 年間（2015 年 10 月～2016 年 8 月）東京学芸大学に留学しました。同校に留学したことは私の人生で非常に大切な経験でした。留学するまえに、様々な情報源から同校について得た情報では同校が教育関連分野で高い評価を得ており、教育政策と教員教育における革新的な役割を果たしているそうです。

留学生として、同校に留学するのは私にとって日本国、特に日本社会と教育についての知識を豊かにするよい機会でした。同校が提供した「日研生特別演習」という科目は日本についてもっと深くわかるように非常に役に立つと思います。この演習で様々な場所、附属小学校から衆議院まで訪ねて、

日本の教育から政治または政府までについての知識を増やす機会になりました。

「日研生特別演習」の中で、附属小学校を訪ねたとき、留学生も母国について生徒達に発表できました。海外で母国について他の人、特に小学生たちに紹介することが非常にうれしいと思います。この活動により、生徒達は他国への関心が高まり、将来国間の友好関係が強化できることが期待されます。東京学芸大学で留学するあいだ、私は同校の留学生寮に住んで、他の留学生と日本人学生と交流することもできるし、一緒に勉強することもできました。日本人の友達にチューターになってもらって、いろいろなこと、例えば日本語の上達を手伝ってもらいました。寮は一緒に勉強して、助け合いのところでした。

東京学芸大学への留学で経験したのは自分のスキルと知識を向上させることだけでなく、日本人と外国人の友情関係を築くことです。



教員研修生として過ごした1年半の思い出

ジャン ソヨン（韓国）

2011 年度 教員研修留学プログラム

[1. 新しい生活にチャレンジ] 2011 年 10 月 3 日、日本に着いた。次の日から、日本生活スタート。どこでも手続きには時間が非常にかかり、待つ時間は長かった。学校の前にバス停があったが、なぜか歩かなければいけないような気がした。リサイクルショップから物を買って、キャリーカートに載せて物を持って来た時にはすごく胸がいっぱいだった。韓国で当たり前に思っていた生活が、ここでは感謝と特別な気持ちだった。色々な授業を聞くことができた。



また大学生に戻った気がした。7、8年間先生として働いた経験があったが、ここでは今までの経験とキャリアはゼロになった気がした。何かもっと積極的に学ばなければならないという不安感があった。まず、公立図書館めぐりを始めた。本の香りは魅力的だった。本の中には別の世界があった。

[2. ゆっくり歩けば] 子供の幼稚園は小平にあって、徒歩1時間。暑い夏には汗まみれになった。私と息子は、多くの時間を道で過ごした。ますます私の足は丈夫になった。どのくらい歩いても疲れがなかった。汗を流しながら歩いている時間を楽しめるようになった。

[3. スローテンポといい道] 外国生活というのは言語の問題や文化の違いによる生活の難しさがあった。でも、私には考えられる時間がたくさんできた。瞬間的には遠回りするように見えるが、結局良い道を歩けるようになってしまった。新しいことを一つずつ学んでいき、さまざまな人々との思い出を作っていくこと。それは私にとっては大切に貴重な経験になると思った。

[4. 最後に：釜めし] 釜めしはできあがりまで時間がけっこうかかる。そして、火を止めてご飯を蒸らさなければいけない。しかし、時間がかかるだけの深い味がある。私の日本の生活は釜めしを作る過程に似ていると思う。待っている時間の楽しさが理解できて、深い味わいを楽しめる、今の私になった。

時が経っても、遠く離れていても、ずっと友達

セーンウライ・ティティソーン (タイ)

2005 年度 ISEP

東京学芸大学留学生センター創立 20 周年おめでとうございます。

私が交換留学生として東京学芸大学に留学したのは 2005 年のことです。はじめての海外留学でした。はじめての一人暮らしでした。留学してから最初の 1、2 ヶ月は日本での生活に全然慣れませんでした。特に、電車の乗り方でした。日本の路線図がとても複雑で、いくら見ても全くわかりませんでした。ホームや乗る電車を間違えた経験が何回もありました。その時は英会話も日本語も下手だったので、あまりコミュニケーションをとれませんでした。日常生活で困ったことがたくさんあって、不安をいっぱい抱え、ホームシックにもなっていました。



ホームシックを乗り越えられたのは、同じ寮に住んでいる友達のおかげでした。私が住んでいる寮は東久留米国際学生宿舎でした。その寮には日本人の学生も外国人の留学生もいました。ほぼ毎日共同キッチンに行くと、その人たちと会えて、料理を作りながら会話をしたり、多目的室で一緒にご飯を食べたり、勉強したりすることによって友達ができました。冬休みにも一緒に旅行に行きました。それまでのさびしい生活が楽しい生活に変わりました。帰国するまで残り半年でしたが、毎日、楽しい生活を送っていたので、逆に、留学後半は帰国したくなくなりました。帰国日が近づいてくると、思わず涙がこぼれてきたのを今でも覚えています。

東京学芸大学に留学してからあっという間に 13 年も経ちました。時間が経つのが早いなあとも思います。今では友達がみんな社会人になっていますが、時が経っても、遠く離れていても、その友達と連絡を取り続けています。本当に東京学芸大学の ISEP プログラムのおかげで、東久留米国際学生宿舎の皆さんに出会えることができたので、とてもよかったと思います。

異文化を学び、日本と母国の架け橋を目指す

マニユエル・ペーター・サドフスキー (ドイツ)

2010 年度 一般交換留学プログラム

この度は東京学芸大学の留学生センターが 20 周年を迎えることとなり、誠におめでとうございます。私が東京学芸大学に留学した頃から既に 7 年経ちましたが、留学の思い出は今でも鮮明に覚えています。東京学芸大学では交換留学という形で 2 学期勉強しており、中では留学生向けの日本語の授業をはじめ、日本人向けの授業にも出席しました。ドイツにある母校とは違い、留学生センターが行う授業では一つの日本語授業ではなく、授業が様々な分野に分かれています。文法・読解・漢字・作文・ビジネス日本語など、様々な形で学ぶことができるという方法が、母校での 2 年間の日本語コースを終了した後に非常に良い勉強とつながったと思い、大変感謝しています。また、「学芸フロンティア」という留学生と日本人学生がともに受けて、異文化について学ぶという授業はとても興味深く、特に好きでした。



在学中の研究テーマは、指導教員の李修京教授のご指導をいただき、「在日コリアンのアイデンティティ」について学びました。留学を終えて、ドイツで卒業でき、その後大学院に進学し、韓流ブームが在日コリアンへどんな影響を及ぼしたかについて修士論文を執筆し、研究を深めました。留学や研究テーマから学べた異文化理解は私にとってとても大切な財産となり、大学生活を終えてからでも積極的に活用したいという思いが強かったです。大学院終了後の翌年には念願の JET プログラムへの参加が決まりました。国際交流員として佐賀県の有田町で3年間日本とドイツの姉妹都市交流を支えることができました。現在は三重県で仕事し、試作を行う企業で技術的な分野について学びながら日本とドイツやヨーロッパの経済交流を支えるつもりです。

留学生センターには大変お世話になっており、これからもたくさんの国からの留学生の日本語教育を支えることを心から願っており、20 周年記念のご挨拶とさせていただきます。

サポートされる側からサポートする側へ

曹 琳琳（中国）

2004～2009 年度 学部・大学院

14 年前、教師になるという夢を抱き、東京学芸大学を目指していた。教育学の世界で著名な学府として難易度の高い大学だと知りながらも、どうしても挑戦してみたかった。やがて夢が叶って、桜満開の4月に学芸大に入学できた。将来は日本語を教えたいと考えており、日本語教育専攻を選んだ。学部の4年間と修士の2年間、合わせて6年間を学芸大で過ごした。

日本に来て間もない時期の20代、学芸大で吸収したのは教育学に関する知識だけではなく、日本の礼儀や文化、習慣など日本社会そのものだった。

また、自分の人生観、つまり「教育を通じて、人を成長させ、幸せにさせ、豊かにさせたい」という考え方を形成した大事な時期でもあったと思う。

卒業後、日本語教師の道には進まなかったが、教育に関わりたいという自分の心からの声に従い、外国人留学生のキャリア教育の仕事に従事し、早くも7年間経っている。この7年間を振り返ってみると、日本全国にいる数十カ国、7,000人以上の外国人留学生の就職をサポートでき、講師としても大学で留学生の就活を指導し、とても充実した実りのある7年間だった。仕事の中で、かつて学芸大で学んだ日本語を教えるための知識、教育の方法や、タイの大学での教育実習の経験等、そのすべてが役に立った。それから恩師の谷部先生と加藤先生から感じていた教育に対する情熱、学生に注ぐ無限の愛情を持って、自分の学生に接して学生達とも厚い信頼関係を構築できた。

この7年間積み重ねてきた実績が自分に大きな自信を与え、教育が自分の天職だと思うようになった。以前は学芸大で先生方や皆さまにサポートしていただき、そのお陰で今日の自分がある。今後はその恩返しとして、留学生センターで日本語や日本の文化を学ばれている後輩のサポーターとして、精一杯努めさせていただきたい。最後にこの場を借りて母校と恩師に感謝申し上げたい。



ピンポン球を追いかけて

常次 亨介

2003～2006 年度 学部（国際理解教育課程）

東京学芸大学の敷地内に国際交流会館という留学生のための寮がある。僕はそこに2006年から1年間、レジデンスアシスタントとして住み込んだ。寮のロビーの片隅には、卓球台が設置されていて、僕は寮に住み込んだその1年間、よくこの卓球台を挟んで留学生たちと交流した。ロビーでの卓球に興ずる留学生はたくさんいたが、このエッセーでは、毎晩のように躍起になってストイックにラケットを振り続けたルーマニア人のイルディ、韓国人のムンとのストーリーにフォーカスしようと思う。



卓球初心者の僕たち3人は、毎晩のように卓球台を挟んでラケットを振った。素人の独学なので確かな技術とは言い難いだろうけど、それでも僕たちは着実に卓球の腕を磨き、毎試合白熱したラリーを繰り広げた。

イルディは律儀な性格で、きた球をいつも丁寧に打ち返した。また、打った球がネットインでの得点となった際には、彼女は必ず「ごめんね」と日本語で言った。ムンは気性が荒く、常に主導権を握ろうとしてすぐにスマッシュを打った。性急なスマッシュの半分以上はネットに遮られるか、明後日の方向に飛んでいった。僕はといえば、相手がよそ見をしている間にサーブを打ったり、大声をあげてスマッシュするふりをして、ちょこんと手前に落としたり、トリッキーなプレーに徹した。それに対してイルディはいつもルーマニア語で「Smecher（＝ずる賢い）」と抗議した。また、卓球を通して彼らのその時々的心情が伝わってくることもあった。いつも穏やかなイルディがやけに攻撃的な日もあったし、ムンのスマッシュに威勢がない日もあった。けれど「何かあったの？」なんて訊くこともなく、僕たちはただただピンポン球を打ち続けた。そう、僕たちの卓球はいつだって、日常に寄り添い、それを包み込むものだった。

僕たち3人はもう一緒に卓球をする機会もない。それでも、あの時代に打ち続けたピンポン球の音は今でも耳の奥で鳴り響き、ラケットを振る彼らの「今」を物語り続けている。

6. 在学中の留学生からのメッセージ

HELLO FROM THE OTHER SIDE OF THE CLASSROOM: FROM TEACHER TO STUDENT

OZOH DARLINGTON OBINNA (NIGERIA)

2017～2019 MEXT TEACHER TRAINING PROGRAM

My experience as an international student in Japan has been interesting, challenging and also a journey of self-discovery. I arrived Japan on the 28th day of September, 2017 with an un-paralleled joy, having won the prestigious MEXT teacher training scholarship to study in Tokyo Gakugei University (TGU), one of the highly ranked universities for Education in Japan, under the supervision of **Nakanishi Fumi (Phd)**. Before coming to Japan, I worked as a biology/ science teacher in Nigeria, and I had recently earned a Master of Science in Biology Education degree from the University of Benin, Nigeria. These professional and academic experiences, granted me the robust background to explore a new phase of life (academic, social and otherwise) in other climes of the world.

Shocks:- Culture, Technology and Weather

After the first two months in Japan, I was filled with mixed feelings, because while it was exciting for me to be in Japan and in a good school like TGU with beautiful scenery, classrooms, well equipped laboratories, I battled with shocks - culture, technology and weather. I couldn't understand why it gets dawn so early in Japan. In fact, there was this day I prepared for lectures and when I checked my wrist watch, I realised it was just 4:30am. I couldn't believe it; . The weather also got to me , unbearable cold, this meant I had to figure out how to keep myself warm all the time , the use of chopsticks ,the washlet toilet etc.

**Japanese Language and I**

Studying Japanese Language made me see the patient and always positive nature of the Japanese people, as the “Senseis” were so patient with my classmates and I, as they kept encouraging us (Ganbattekudasi- がんばってください, meaning – hang in there). The most remarkable moment was when **Hui Sensei**, out of surprise, announced in class that I had the highest score in one of the Japanese grammar tests and my classmates couldn't help but clap in pleasant surprise for it was obvious to even the blind that I was the worst student in class at the beginning. At that point, I fully realized that whether we think we can, or think we can't, - we are right. And as a teacher, it further re-affirmed the importance of positive reinforcement on students. This motivated me to make the decision to study Japanese language till the end of my stay at the university, as against the mandatory first six months of arrival.

University Support and Social Environment

TGU has a well efficient administration structure, and the hospitality (Omotenashi) shown to international students is overwhelming- typical of the Japanese culture. TGU offers an ideal multicultural environment as it plays host to large population of international students under various programs. Through the International Student Exchange Center (GISEC), TGU provided us with various avenues to interact with other international and Japanese students, understand our immediate environment as well as the country in general, and this made me to appreciate our cultural diversity more.

Research on Biology/Science Education

The structure of the Teacher training program was such that it aided cross-fertilization of ideas, experience and collaboration between teachers from different countries, study of the Japanese education system and visiting Japanese schools. Under the tutelage of my supervisor I was equipped with robust Biology Pedagogical Content Knowledge(PCK). I later investigated cheaper ways of making some of these materials and laboratory equipment (microscopes, stain chemical reagents etc.) to aid science teaching and learning in underdeveloped and developing nations, particularly in Nigeria.

11ヶ月で得られること

ドアミ メロ アンジェラ アユミ (ブラジル)

2018年度 日本語・日本文化研修留学プログラム

私はブラジルから来たドアミ・アンジェラです。私の他、同じプログラムに参加している10人の留学生たちも遠い国、近い国から来られている方たちです。私たちのプログラムは日本語・日本文化研修で、みんなが言語力や日本についての知識を高めたいと思っているのはもちろんですが、一人一人がもっている目的はやはり違うと気づいたのは、2ヶ月経った今です。

『日本人の友達を作りたい』や『ここで就職したい』などの声があれば『国に帰ってからここで学んだことをシェアしたい』や『自分の国で日本の礼儀を伝えたい』などもあります。私も様々な理由で来ていまして、みんなといちばん違うと思ったのは『どこまで1人の人間として成長できるのか』。正直、どの国でも外国人になることは簡単ではないので、お互い手伝える力を身につけて、助け合える人になりたいと思ってこの留学に臨みました。

これからまだ9ヶ月一緒に住んで、生きていく仲間と、旅行や、徹夜しながらレポートを書いたり、宿題をしたり、日本語を間違えて恥をかって笑ったり、料理をしたり、外国の料理を食べたり、留学でしか得られない経験があると信じています。そして、この留学でなかったら深められない絆があると思っています。

自分の国と日本の文化以外の留学生と触れ合って、交際して、もっと世界の知識を高めることも留学でしか得られないことではないのでしょうか。こんな広い世界のいくつかの国の文化について学んで、それぞれ最高の点と点を繋いで新たな道を作り、その上を歩むのが留学ではないのでしょうか。

この11ヶ月、何を得て、どんな人になっていくのか楽しみです。一人一人の答えは違うかもしれませんが、帰国してからも、ぜひ他の学生にこのような経験を得てもらいたいと、みんながそう思っています。

留学生センターが20周年を迎え、これからも東京学芸大学の学生、これから来られる留学生の人生を導いていくと思うと、幸せな気持ちが溢れます。

留学生センターの20周年記念誌のため

ファン ティ フオン ザン (ベトナム)

2018年度 一般交換留学プログラム

留学生センターの20周年記念誌のために、まず、留学生センターの先生方にお礼を言いたと思います。留学生のセンターの先生方は留学生に自分の日本語能力に応じて授業を作ってくださいました。日本語の色々なスキルを勉強するだけではありません。授業によって、日本の文化も述べられています。おまけに、先生が非常に熱心です。学生の指導に非常に一生懸命だからなのです。私は作文や宿題を出したら、先生が本当に細かく読んでくださって、丁寧にコメントをくださいました。そのとき、本当に感動しました。特に、伊能先生にお礼をお伝えしたいのです。先学期、伊能先生の漢字の授業をとりました。その前は、漢字が嫌いなので、苦手でした。しかし、伊能先生の授業で勉強したあと、教え方がわかりやすいし、漢字のイメージがおもしろいし、私に漢字を勉強する意欲を高めてくださいました。では、留学生センターの先生方ならびに、留学生センターのいっそうの発展を期待しています。



チェンジした一学期

張 雨涵 (中国)

2018年度 研究生[日本語教育]

留学生センターとの縁はプレースメントテストから始まりました。

それからもう8ヶ月が経って、色々な授業を履修して、活動もたくさん参加して、自分がいつの間にか変わってきました。

授業の中には、齋藤先生のプレゼンテーションと南浦先生の口頭コミュニケーションが最も面白かったです。齋藤先生の授業は、自分の関心のあるテーマを決めて、それについてインターネット調査を行って、その結果をポスターで中間発表にしました。齋藤先生の授業は、自分の関心のあるテーマを決めて、それについてインターネット調査を行って、その結果をポスターで中間発表にしました。ネット調査の結果により、さらに調べたい問題点を探して、アンケート調査をして、結果をまとめてパワーポイント発表するというシラバスでした。一学期の授業で、私達は発表によりスピーチする能力が鍛えられ、大学の授業にある様々な課題を解決する能力も身につけられました。最後の発表は先生の日本人学生たちが聞いてくれました。自分が前よりずっとスムーズに自分の考えを日本語でみんなにわかるように話せて、準備のないコメントのやりとりもうまくやったのが自分も驚きました。南浦先生の授業は二人組で日本人にインタビューして、その内容を記事にして、本を作ることでした。「知らない人に話しかける方」「丁寧な依頼方」などの知識を学ぶことができました。取材の初めは緊張のせいで、準備した質問しか聞きませんでしたが、いただいたインタービ



ューのストラテジーがだんだん運用でき、日本語で話すことへ自信を持ってきました。最後に本当に自分の本までできたのが思いませんでした。そして、岡先生が主催された合宿にも参加しました。合宿は世界各地からの留学生と日本人学生が集まって過ごした二日でした。日本語しか共通していなかったのに、二日間にみんなで食事、ゲーム、ヒューマンライブラリーの交流、グループ発表、太極拳、乳しぼり、山登りなどの活動のおかげで、異文化の壁が消えて、誰に対しても日本語で気軽に話しかけられるようになりました。

これからも留学生センターとみなさんと一緒に頑張りましょう！

下水溝のふたからの考え

ソムブーンポーン・ティーラカーン（タイ）

2018 年度 研究生[日本語教育]

日本の一つの特徴は、「下水溝のふた」です。日本の下水溝のふたには、それぞれの場所の特徴あるいは名物の絵を描いてあります。その点は、その場所の有名なものを紹介できるだけでなく、書いてあるそのところの名前を見ると、「今はどこですか」とすぐに分かります。下水溝のふたは、どの道でも見られますから、散歩するのをもっと楽しくなると思います。

すると…ある日、自分の思いに沈んで散歩している間に、気が付くと、下水溝のふたのところに止まっていました。その瞬間、下水溝のふたを見ながら何かの考えが頭に浮かびました。

人生が道のような道だったら、一步一步歩くのは人生の流れが進んでいくようだという考えでした。道の役割は行く人に行き先まで導いてくれることで、「今、人生の道で自分が立っているのはどこか」「どれぐらい通ったか」「行き先までどれぐらい離れているか」という質問が出てきました。

人生の道は、道標や地図のような道を案内する道具、あるいは下水溝のふたさえありませんから、迷ってしまうのは当たり前ではないでしょうか。そうだったら、迷っても…失敗しても…止まらない限り、ゆっくりでも前に進んでやっ行き先に着くと、私は信じています。

今回、私は研究留学生として「東京学芸大学」に来ましたが、それもまるで自分の新しい道を選んだようです。まだ初心者で、自分の力が足りなくても、これからどうすればいいのかがまだ分からなくても、様々なミスを思わずしてしまっても、諦めません。今は、まだ人生の道の初めに立っていますが、一歩ずつ自分の足で歩けます。どれぐらい行けるのか、行き先に着くのか、将来のことですから、「案ずるより産むが易し」のように心配しなくてもいいと思います。現在は将来の元で、今全力で頑張れば、将来は必ずいい結果になるに違いありません。

それで、まずは自分の位置を調べましょう。



7. 開設授業一覧

日本語科目

日本語科目は毎学期プレイスメントテストを実施し、レベル5（初級）からレベル1（上級）までの5段階のレベル設定を行っている。2018年度の開設科目は以下の通りである。また、(*)は、学部開設科目である。

2018 年春学期

レベル	科目名	担当者
1	日本語1 総合A	桂 千佳子（非常勤講師）
	日本語1 講読A	布施 悠子（非常勤講師）
	日本語1 作文A1／日本語表現法C （ライティングI）（*）	北澤 尚（国語科教室）
	日本語1 作文A2	小池 恵己子（非常勤講師）
	日本語1 会話A／日本語表現法A （口頭コミュニケーションI）（*）	南浦 涼介（国語科教室）
	日本語1 聴解A	林 亜友美（非常勤講師）
	日本語1 文法A	岩崎 拓也（非常勤講師）
	日本語1 漢字A	横山 和子（非常勤講師）
	日本語1 特別演習A（ドラマで学ぶ日本語）	宮本 典以子（非常勤講師）
	日本語1 特別演習A（小説で学ぶ日本語）	鈴木 美恵子（非常勤講師）
	日本語1 特別演習A（ビジネス日本語）	福島 恵美子（非常勤講師）
	日本語1 特別演習A（プレゼンテーション）/ 日本語表現法E（プレゼンテーションI）（*）	齋藤 ひろみ（国語科教室）
	日本語1・2 特別演習（プロジェクト） （学芸フロンティア科目F(*)との合同授業）	谷部 弘子（留学生センター）
2	日本語2 総合A	横山 和子（非常勤講師）
	日本語2 講読A1	桂 千佳子（非常勤講師）
	日本語2 講読A2	新谷 あゆり（非常勤講師）
	日本語2 作文A1	福島 恵美子（非常勤講師）
	日本語2 作文A2	林 亜友美（非常勤講師）
	日本語2 会話A1	小池 恵己子（非常勤講師）
	日本語2 会話A2	鈴木 美恵子（非常勤講師）
	日本語2 聴解A	桂 千佳子（非常勤講師）
	日本語2 文法A1	伊能 裕晃（留学生センター）
	日本語2 文法A2	岡 智之（留学生センター）
	日本語2 漢字A	笹目 実（非常勤講師）
	日本語2 特別演習A（マンガで学ぶ日本語）	宮本 典以子（非常勤講師）
	日本語2 特別演習A（音声表現）	石崎 晶子（非常勤講師）
3	日本語3 総合A1	鈴木 美恵子（非常勤講師）
	日本語3 総合A2	鈴木 美恵子（非常勤講師）
	日本語3 講読A	桂 千佳子（非常勤講師）
	日本語3 作文A	石崎 晶子（非常勤講師）
	日本語3 会話A	布施 悠子（非常勤講師）
	日本語3 聴解A	新谷 あゆり（非常勤講師）
	日本語3 文法A	岩崎 拓也（非常勤講師）
	日本語3 漢字A	伊能 裕晃（留学生センター）
4	日本語4 総合A（4コマ/週）	今井 美登里、渋川 晶（非常勤講師）
	日本語4 講読A	笹目 実（非常勤講師）
	日本語4 作文A	横山 和子（非常勤講師）
	日本語4 会話A	岡 智之（留学生センター）
	日本語4 漢字A	笹目 実（非常勤講師）
5	日本語5 総合A（2コマ/週）	許 夏玲（留学生センター）、飯野 清士（非常勤講師）
	日本語5 総合A（文法）（2コマ/週）	許 夏玲（留学生センター）、飯野 清士（非常勤講師）

	日本語 5 講読A	李 貞攸 (非常勤講師)
	日本語 5 会話A	宮本 典以子 (非常勤講師)
	日本語 5 作文A	坂田 睦深 (非常勤講師)
	日本語 5 聴解A	李 貞攸 (非常勤講師)
	日本語 5 漢字A (2 コマ/週)	坂田 睦深、宮本 典以子 (非常勤講師)

※計 46 科目

2018 年秋学期

レベル	科目名	担当者
1	日本語 1 総合B	谷部 弘子 (留学生センター)
	日本語 1 講読B 1	横山 和子 (非常勤講師)
	日本語 1 講読B 2	新谷 あゆり (非常勤講師)
	日本語 1 作文B 1	桂 千佳子 (非常勤講師)
	日本語 1 作文B 2 / 日本語表現法D (ライティングII) (*)	北澤 尚 (国語科教室)
	日本語 1 会話B 1 / 日本語表現法B (口頭コミュニケーションII) (*)	齋藤 ひろみ (国語科教室)
	日本語 1 会話B 2	鈴木 美恵子 (非常勤講師)
	日本語 1 会話B 3 / 日本語表現法F (プレゼンテーションII) (*)	南浦 涼介 (国語科教室)
	日本語 1 聴解B	林 亜友美 (非常勤講師)
	日本語 1 文法B	小池 恵己子 (非常勤講師)
	日本語 1 漢字B	岩崎 拓也 (非常勤講師)
	日本語 1 特別演習B (ドラマで学ぶ日本語)	宮本 典以子 (非常勤講師)
	日本語 1 特別演習B (ビジネス日本語)	福島 恵美子 (非常勤講師)
2	日本語 2 総合B	横山 和子 (非常勤講師)
	日本語 2 講読B 1	桂 千佳子 (非常勤講師)
	日本語 2 講読B 2	林 亜友美 (非常勤講師)
	日本語 2 作文B 1	李 貞攸 (非常勤講師)
	日本語 2 作文B 2	荒巻 朋子 (非常勤講師)
	日本語 2 会話B 1	岩崎 拓也 (非常勤講師)
	日本語 2 会話B 2	布施 悠子 (非常勤講師)
	日本語 2 聴解B	桂 千佳子 (非常勤講師)
	日本語 2 文法B 1	福島 恵美子 (非常勤講師)
	日本語 2 文法B 2	許 夏玲 (留学生センター)
	日本語 2 漢字B	谷部 弘子 (留学生センター)
	日本語 2 特別演習B (マンガで学ぶ日本語)	宮本 典以子 (非常勤講師)
	日本語 2 特別演習B (ビジネス日本語)	笹目 実 (非常勤講師)
	日本語 2 特別演習B (音声表現)	石崎 晶子 (非常勤講師)
3	日本語 3 総合B 1	伊能 裕晃 (留学生センター)
	日本語 3 総合B 2	伊能 裕晃 (留学生センター)
	日本語 3 講読B	桂 千佳子 (非常勤講師)
	日本語 3 作文B 1	許 夏玲 (留学生センター)
	日本語 3 作文B 2	鈴木 美恵子 (非常勤講師)
	日本語 3 会話B	小西 円 (留学生センター)
	日本語 3 聴解B	新谷 あゆり (非常勤講師)
	日本語 3 文法B	荒巻 朋子 (非常勤講師)
	日本語 3 漢字B	伊能 裕晃 (留学生センター)
	日本語 3 特別演習B (プロジェクト)	小池 恵己子 (非常勤講師)
4	日本語 4 総合B (4 コマ/週)	今井 美登里、宮本 典以子 (非常勤講師)
	日本語 4 講読B	李 貞攸 (非常勤講師)
	日本語 4 作文B	横山 和子 (非常勤講師)
	日本語 4 会話B	笹目 実 (非常勤講師)
	日本語 4 漢字B	李 貞攸 (非常勤講師)

5	日本語 5 総合B (文法) (2 コマ/週)	笹目 実 (非常勤講師)
	日本語 5 総合B (2 コマ/週)	飯野 清士 (非常勤講師)
	日本語 5 講読B	李 貞岐 (非常勤講師)
	日本語 5 会話B	岡 智之 (留学生センター)
	日本語 5 作文B	坂田 睦深 (非常勤講師)
	日本語 5 聴解B	石崎 晶子 (非常勤講師)
	日本語 5 漢字B (2 コマ/週)	坂田 睦深、布施 悠子 (非常勤講師)
	日本語 5 特別演習B	許 夏玲 (留学生センター)

※計 50 科目

日本理解科目

日本理解科目は日本の教育・人文社会・芸術・自然科学の分野から、学校教育・宗教・経済・アニメ・書道・環境等、様々なテーマの授業を開設している。

2018 年春学期

科目名	担当者
日本理解A (教育)	李 紅実 (非常勤講師)
日本理解C (人文)	有澤 知乃 (留学生センター)
日本理解E (人文)	高崎 恵 (非常勤講師)
日本理解G (自然)	澤田 康德 (地理学教室)

2018 年秋学期

科目名	担当者
日本理解B (教育)	遠座 知恵 (学校教育教室)
日本理解D (人文)	千田 洋幸 (国語科教室)
日本理解F (社会)	加藤 拓 (非常勤講師)
日本理解H (芸術)	石井 健 (書道科教室)

※計 8 科目

多文化共修科目

多文化共修科目は学部の総合学芸領域 (CA) 科目との共通開設となっており、留学生と日本人学生がグループワークやディスカッションを通して互いに学び合うことを目的としている。

2018 年春学期

科目名	担当者
多文化共修A 異文化理解とコミュニケーション	岡 智之 (留学生センター)
多文化共修C 世界の言語と文化	伊能 裕晃 (留学生センター)

2018 年秋学期

科目名	担当者
多文化共修B 多文化社会とコミュニケーション	岡 智之 (留学生センター)
多文化共修D 世界の民族と文化	有澤 知乃 (留学生センター)

※計 4 科目

ISEP (International Student Education Program) 科目

ISEP 科目は英語を教授言語としており、日本語では専門的な理解が難しい留学生でも、英語能力があれば様々な専門分野における学びを深めることを可能にしている。なお、一部科目は学部・大学院との共通開設となっており、日本人学生と留学生との共修の機会を提供している。

(*)学部 総合学芸領域科目(CA), (**)学部 選択必修科目 (SA), (***) 大学院 教育実践開発科目。

2018 年春学期

科目名	担当者
Educational System and School Reform in Japan	末松 裕基 (学校教育教室)
Cross-Cultural Ideas and Activities (**)	戸田 孝子 (国際教育教室)
Cross-cultural Discussion and Presentation (***)	戸田 孝子 (国際教育教室)
Cultural Social Psychology of the Japanese (*)	杉森 伸吉 (学校心理教室), David Wong (客員准教授)
Counseling and Development in Japan	佐野 秀樹 (学校心理教室)
Introduction to Psychophysiology (*)	池田 一成 (学校心理教室)
The Aesthetics and Affects of Cuteness	Joshua P. Dale (英語科教室)
Exploring the Cultural Diversity of Japan I (*)	有澤 知乃 (留学生センター)
Introduction to Japanese Music: Koto and Singing	有澤 知乃 (留学生センター)
ISEP Seminar II	有澤 知乃 (留学生センター)
Theatre Workshop (*)	高尾 隆 (表現教育教室)
Japanese Martial Arts: Judo	久保田 浩史 (保健体育科教室)
Recreation and Sports in Japan : Cycling	渡辺 雅之 (保健体育科教室)
Recreation and Sports in Japan: Aquatic Sports (Swimming)	森山 進一郎 (保健体育科教室)

2018 年秋学期

科目名	担当者
Study of Japanese Schools	前原 健二 (教育カリキュラム開発研究センター)
Cross-Cultural Teaching Practice (**)	戸田 孝子 (国際教育教室)
Exploring the Cultural Diversity of Japan II (*)	有澤 知乃 (留学生センター)
Traditional Performing Arts of Japan	有澤 知乃 (留学生センター)
ISEP Seminar I	有澤 知乃 (留学生センター)
Critical Issues in Contemporary Japanese Society	オムニバス
Cultural Identity and Cultural Difference	Joshua P. Dale (英語科教室)
Natural Science in Japan	藤本 光一郎 (理科教室)
Japanese Business Enterprises	原田 和雄 (理科教室)
Study of The Traditional Metal Carving Technique	古瀬 政弘 (美術科教室)
Sports and Physical Activities for Children in Japan	鈴木 直樹 (保健体育科教室)
Recreation and Sports in Japan : Table Tennis	渡辺 雅之 (保健体育科教室)
Recreation and Sports in Japan : Skiing	新海 宏成 (保健体育科教室)

※計 27 科目

8. 特色ある授業の紹介

多読（日本語科目）

桂 千佳子（留学生センター）

「多読 TADOKU」とは主に「①やさしいレベルから読む②辞書を引かないで読む③わからないところは飛ばして読む④進まなくなったら他の本を読む」というルールに従って、各自が読みたいものを自分で選び、自分のペースで読んでいくスタイルの「読解」授業である。既習語を考慮して作成されている



「レベル別の読み物」から読み始めていく。教師は、支援者として位置づけられ、励ましたり助言したりしながら、より楽しめるよう導いていく。慣れてきたら、絵本や児童書、ジュニア向けの本や事典類などといった市販書へと進めていく。

センターで学ぶ留学生は、立場や期間、学習目的も年齢も異なり多様であるため、通常の読解授業で全員のレベルやニーズに応じた教材を選定するのは至難である。また、外国語だと、「学ぶ」のではなく、母語と同じように「読むことを楽しむ」という感覚を持つことが難しい。特に、初中級の非漢字圏の学生は「漢字があるから日本語の本は読めない」と最初から読むのをあきらめている場合が多い。

だが、多読では自分で読むものを選び、楽しんで読んでいくうちに、日本語での読書習慣が身に付き、初級後半の学生の中には、自分でマンガを買って読むようになったり、図書館の本を借りるようになったりした学生もいる。議論が活発にできる上級クラスの学生でも「初めて普通に読書ができた」「辞書を引かなくちゃという強迫観念なく気楽に楽しめた」と目を輝かせるのだ。

クラスの枠を超え、自分の人生に日本語での読書の楽しみを加えられる授業である。

特別演習 マンガで学ぶ日本語（日本語科目）

宮本 典以子（留学生センター）

「マンガで学ぶ日本語」は開講して10年になります。はじめは「ドラマ」と交互で、春か秋どちらかの学期での開講でしたが、すぐに毎学期開講に変更となり現在に至っています。



最近の授業構成は、①「漫画多読タイム」②その日の漫画作品について作品情報及び語彙・表現の学習（前作業）③漫画読解（本作業）④アニメでその場面を学習（後作業）が基本となっています。それ以外に希望に応じて、漫画の描き方や漫画の歴史、アニメソング、漫画・アニメに関する豆知識、アフレコ・声優情報、漫画・アニメのメイキング情報などを扱うこともあります。

毎回多読記録シートや授業アンケートを記入し提出します。そのコメント欄には、「だんだん読むのが速くなった」といった自己評価や、ストーリー、漫画の装丁、キャスト、音楽、アニメーション技術、アニメ制作会社などに関する内容など、各自の関心分野が多岐にわたって記入されています。

今 10 年を振り返ると、開講を心から喜ぶ学生の様子が強く印象に残っています。その後も皆さんの真剣な学習の様子には感動の連続でした。今後も漫画好きな皆さんと 90 分を共有できることに感謝します。

日本語 1・2 特別演習 A（プロジェクト）／学芸フロンティア科目 F

谷部 弘子（留学生センター）

「日本語 1・2 特別演習 A（プロジェクト）」は学部開設科目「学芸フロンティア科目 F」との合同授業という形をとり、一般学生と留学生との共修科目として実施してきた。受講者数は例年 50 名前後である。基本的には能動的学修の形態としてグループワークを採用し、学生間の関係構築や自己や自文化を客観的に見る視点や視野の拡張を目指しているが、教授内容・学習形態など試行錯誤を繰り返してきた。この数年は、グループ学習を主とした演習形式と、教授者やゲストスピーカーによる講義を軸とした講義形式のバランスを取ることで、課題の克服に努めている。授業の

全体テーマは、教員養成系大学の特性を生かし「ともに学ぶ世界の“まなび”の場」とした。具体的な内容としては、前半は「“まなび”の場」をキーワードとして選んだドキュメンタリー映像のグループ別視聴・意見交換・ポスター発表、後半は「社会の多様性と教育」をテーマとした講義・フィールドワーク・ディスカッションを行なっている。後半の 1 回には受講者と同世代の「当事者」（UNHCR 難民高等教育プログラム生、札幌大学ウレシパ奨学生など）を招いて語っていただくようにしているが、同世代の率直な語りに対する反響は大きい。

本授業ではこれまで多数の学内教員の協力をいただいた。また、受講生の先輩にあたる元日研究生のサンジェイ・パンダさん、元国費研究生のティダ・ウェイさんに講義をお願いした年もある。学外のゲストスピーカー招請は島田めぐみ元・本センター教員（本授業も担当）とともに受けた「ワシントンアジア財団」の助成に拠っている。ここにあらためて感謝申し上げたい。



ポスター発表の様子（2018）

日本理解D：人文（日本理解科目）

千田 洋幸（国語科教室）

「日本理解D」は、アニメを中心とするポップカルチャーを取り上げながら、日本の文化・社会のあり方について考察する授業である。しばしば言われるように、来日する留学生には、いわゆる「オタク文化」のジャンル、特にアニメに詳しい者がとても多い。日本語を学習する題材として好適ということもあるだろうし、アニメが創造する世界そのものに惹かれた、ということももちろんあるだろう。魅力的なキャラクター、劇的な物語展開、一筋縄ではいかない世界観に魅せられるのは、どこの国の留学生も同様らしい。中には、日本人学生顔負けのアニメの知識を披露する留学生もあり、こちらが驚かされることもしばしばだ。当然、授業に対する関心、モチベーションは高い。

もちろん、単にアニメを楽しむための授業ではない。アニメは娯楽物であると同時に文化表現であり、知性を働かせてそれを解説すれば、日本という国に内在する文化と社会の問題にしっかり向き合うことができる。その方法を学び、異文化を理解するための視野を広げることが、この授業のねらいだ。今後も、アニメを初めとするポップカルチャーが、日本と留学生とをつなぐ大切なツールであってほしいと思う。

Exploring the Cultural Diversity of Japan II（多文化日本の探求Ⅱ）
（ISEP 科目）

有澤 知乃（留学生センター）

留学生と日本人学生合同でのフィールドワークやディスカッションを通して、日本の移民やマイノリティの問題を世界の事象とも比較しながら多面的に考察していくことを目的としている。初回の授業で「日本は多様な国か？」と問うと、「クリスマスやハロウィーンなどの外国文化が浸透しているし、各国のレストランもあるから多様だ」、「日本人は海外の文化は好きだけど、自分と異なる<人>を受け入れているかという疑問だ」等、様々な意見が出される。その後、横浜中華街や新大久保コリアンタウンなどでのフィールドワークや、アイヌと沖縄の人々による「中野チャランケ祭り」への参加を通して、「移民」や「先住民」の辿った歴史を学ぶと共に、現代社会の多様な人々や文化について考えるうえでの具体的な問題意識を得ていく。

受講生には多民族社会で生まれ育った留学生が多く、また中には自身が移民2世や3世である者も少なからずいる。一方、多くの日本人学生の場合、異文化と隣り合わせで暮らしてきたというケースはまだまだ少ない。このように文化的背景の異なる学生たちが、自らの体験を語り合い意見交換をおこなうことで、「異文化理解」や「多文化共生」について考える多角的視点が得られることを期待している。



アイヌと沖縄の人々の「中野チャランケ祭り」に参加（2018年）

多文化共修科目 A・B

岡 智之（留学生センター）

留学生と日本人学生が共修する科目は、北海道大学、東北大、立命館大など全国で広がっている。（坂本・堀江・米澤（2017）『多文化間共修』学文社）。本学でも、2015 年度に「多文化共修科目」4 科目が学部共通科目として開設され、「多文化共修科目 A 異文化理解とコミュニケーション」「多文化共修科目 B 多文化社会とコミュニケーション」の 2 科目を岡が担当している（岡 2016, 2019）。「多文化共修科目 C 世界の言語と文化」は、斎藤純男、伊能裕晃が担当し、「多文化共修科目 D 世界の民族と文化」は、佐伯英子、有澤知乃が担当している。A, B のトピックとしては、在日外国人問題（在日コリアン、難民問題など）、沖縄基地問題、言語教育問題、グローバル化の問題などを取り上げてきた。体験学習として、朝鮮大学校訪問と学生との交流（毎学期）、群馬県大泉市・太田市のブラジル人学校訪問（2015～2017 年度）、群馬県館林市ロヒンギヤ難民集住地訪問（2018 年春学期）、朝鮮初中級学校の訪問（2018 年秋学期）や、ゲストスピーカーや講演者として、聴覚障がい者、視覚障がい者、セクシュアルマイノリティ（トランスジェンダー）、無国籍者、難民（クルド人、ロヒンギヤ）などを呼んでお話を聞いた。最終発表として、学生それぞれの関心からプロジェクトを作り、発表を行っている。これまでのグループの発表テーマとしては、「外国につながる子どもの支援」「難民問題」「在日コリアン問題」「沖縄基地問題」「LGBT と性教育について」「障がい者とのかかわり方」「イスラム教について」などの多彩なテーマで行われている。2018 年春学期の授業の最終日には、まとめとして、「異文化理解とは何か」というテーマでワールドカフェ形式で、ディスカッションを行った。学生たちは、「異文化理解や、多文化共生は、単に外国人とのコミュニケーションをするということにとどまらない。セクシュアルマイノリティや障がい者などの理解も異文化や多様性の理解として、重要視していかなければならない」などの気づきがあり、今後の学生生活や社会生活に生かしていく知恵としてくれている。今後、多文化共修科目を軸とし、さまざまな課外活動を行い、学内や地域の多文化共生に役立っていけば幸いである。

参考文献

- 岡 智之（2016）「多文化共修科目の挑戦：2015 年春学期「異文化理解とコミュニケーション」の授業実践と振り返り」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ』第 67 集, pp377-397
- 岡 智之（2019, 印刷中）「多文化共修科目 4 年目の振り返り～文化理解の変容に着目して～」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ』第 70 集

9. 事業紹介

東日本大震災被災地の教育支援ボランティア

2011 年度および 2013 年度の2回にわたり、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県石巻市で留学生によるボランティア活動を実施した。第一の目的は、被災地の教育現場の復興と発展に少しでも寄与することであったが、同時に、ボランティア活動を通して被災地の学校や地域社会の取り組みについて、参加学生たちが学びを深めることも意図していた。特に参加学生を中心となる教員研修留学生たちが、帰国後に自身が勤務する学校の防災や災害時の児童生徒のケアに役立てると共に、震災からの復興に取り組む人々との交流について子どもたちに語り継いでもらうことを期待した。

両年度ともに、一般社団法人「プロジェクト結」が運営する被災地の教育支援プログラムに参加した。2011 年度は、文房具や上履きなど子供達に届けられる支援物資の仕分け作業に加えて、被災した小学校で図書館に寄贈された本の整理を行ったり、児童たちと交流したりした。また仮設住宅の集会場では、子どもたちと追いかっこやゲームをしたりして遊び、大人たちの手が足りない分を補い、放課後の時間を有意義に過ごせるよう共に過ごした。2013 年度に訪れた際には支援物資の分配は一段落しており、活動の中心は小中学校と仮設住宅での子どもたちとの交流となった。

はじめは恐る恐る子どもたちと接していた留学生たちも、活動が始まると子どもたちのお兄さん、お姉さんのように親しく関わるようになった。そして、どのような遊びをしたら子どもたちが喜ぶか、仮設住宅の大人や高齢者にはどのように話しかけたら良いか等、毎晩夜遅くまで議論が続いた。出発前は、「傷ついた人々を助けたい」という思いで参加を決めた学生たちも、いつの間にか「子どもたちの笑顔から元気をもらった」、「支援する側とされる側という立場を超えて、皆が一つの家族ようになった」等の気持ちを抱くようになっていた。また交流した子どもたちからは、「ことばがうまく言えなくても伝えたい気持ちがあれば伝えることができると感じた」、「いろいろな国のことを教えてもらったのと、自分たちのはねこ踊りを見てもらえたのが良かった」との感想もあり、一方向の「支援活動」ではなく相互に交流が深められたことにプログラムの意義があった。留学生の中には、母国に帰国してからも仮設住宅で出会った子どもと文通を続ける者もあり、短期間の滞在から人と人との尊いつながりが生まれたことも記しておきたい。



万石浦小学校(2012 年)



仮設住宅「みんなの広場」(2013 年)

プログラム概要(留学生センターホームページ「震災への対応・取り組み」に両年度の活動報告書が掲載されている。)

	2011 年度	2013 年度
日程	2012 年 2 月 12 日～17 日	2013 年 7 月 3 日～6 日
参加者数	11 名(教員研修留学生 8 名, 日本語日本文化研修留学生 1 名, 研究生 1 名, 引率教員 1 名)	12 名(教員研修留学生 5 名, 日本語日本文化研修留学生 1 名, 交換留学生 4 名[ISEP2, 一般 2], 学部日本人学生 1 名, 引率教員 1 名)
活動場所	万石浦小学校, 大原小学校, 貞山小学校, 広瀬小学校, 旧石巻市庁舎, 河南公民館, 仮設住宅	桃生中学校, 大曲小学校, 開北小学校, 旧石巻市庁舎, 河南公民館, 仮設住宅

(文責:有澤 知乃)

附属小金井小学校との交流事業

日本語・日本文化研修留学生(以下、日研生と呼ぶ)は、毎年秋学期に附属小金井小学校の4年生との交流事業を行っている。2005年度から毎年継続して行われており、年に3回交流会を行う場合と、2回行う場合があるが、近年は2回の実施となっている。また4年生の全クラスと交流を行う場合と、1クラスと交流を行う場合があり、附属小学校の学年行事などのスケジュールとの兼ね合いで決定される。

本交流事業における日研生側のねらいは、「交流会を通して、日本の社会や文化、学校に関する知識を深め、日本語の運用力を高める」である。附属小金井小学校側のねらいは、「外国の方々とふれあうことによって、いろいろな国の文化を知ることができる」「お互いの文化や環境などの違いを認め合いながら、積極的に交流することができる」「自分たちで能動的に交流の計画・準備・まとめなどの活動を行うことができる」である。双方の目的にかなう事業となっている。

1回目の交流会は、例年日研生側が「自分の国の紹介」を行う。2017年度は12月13日に、11名の日研生が、模造紙を使って各自の出身国の地理や文化の紹介を行った。この年は、4年生全3クラスとの交流であったため、留学生3～4名が1クラスの担当となり、10名程度のグループに分かれた子供達への発表を2～3回行った。日研生はすべて日本語で対応したため、後日の子供達の振り返りカードには「日本語が上手で驚いた。」「丁寧に説明してくださって、それぞれの国のことがよく伝わってきた。」「みなさん笑顔で、笑顔は大切なコミュニケーションの1つだということがわかった。」などのコメントが見られた。日研生のコメントから



2017年度交流会

らは、「準備のときに不安がたくさんありますが、実際に子供に会って、不安に思った気持ちが消えました。」「小学生は本当に丁寧で、まっすぐなので驚きました。」「子供達からもらった自己紹介カードを読んで、タイのことを思ってくれる子がこんなにたくさんいることにありがたかったです。」などの感想が見られた。また、文化紹介の後、子供達から運動会で行った演舞の披露や合唱の披露があり、日研生を驚かせていた。

2回目の交流会は、例年子供達が「日本の伝統文化の紹介」を行う。2017年度は1月31日に行った。グループごとに日本の伝統的な遊びや歴史などの紹介があり、一緒にお手玉や折り紙をしたり、子供達からのクイズに答えたりする日研生の姿が見られた。また、この日は給食と昼休みを子供たちとともに過ごしており、授業見学などでは見られない学校文化への参加が実現している。コメントシートには、「子供たちと一緒にごはんを食べて、日本の学校のシステムをもう一つ学びました。」「全員がご飯をちゃんと食べきって、自分の食器を片付けて、素晴らしいと思いました。」「一つびっくりしたのは食べた後子供達がすぐ校庭でボール投げとかバスケットとかやりに出ました。ベトナムの小学校でしたら、食べた後でみんな30分ぐらい休憩して、ベッドとかふとんとかの準備をしてから寝ます。」などの感想が見られた。

附属小金井小学校は、東京学芸大学と同じ敷地内にあり、寮から通う日研生たちは、毎日小金井小の前を歩いて歩いている。朝や放課後に子供達とばったり出会うことも少なくなく、交流会の後も顔や名前を覚えて声をかけてくれると嬉しそうに話している姿が印象的であった。日研生の多くは同年代か年上の人との交流を中心としているが、小学生とのふれあいは、日本文化の別の側面を知る大変良い機会になっている。これからも双方に実りある交流事業を行っていききたい。

(文責:小西 円)

附属竹早小学校との交流事業

主に教員研修留学生と ISEP 生が附属竹早小学校を訪問し、3年生～6年生までの児童と英語を使った交流活動に参加している(例年、秋学期に 1 回実施)。活動内容は、竹早小学校の児童が主体となり企画し準備もおこなう。これまでの活動例は、「昔遊びを一緒に楽しもう」「南中ソーランを披露しよう」「おにぎり作り」「いろはカルタ」「はり絵をつくる」「日本の文化を紹介しよう(マンガ・食文化・世界遺産)」等であり、主に、ゲームや日本の伝統的な遊びを通しての交流となっている。

当日は、学年ごとないしクラスごとにまとまって一つの活動を行う。各学年の「ねらい」は下記の通りである(附属竹早小学校資料による)：

3 年生：外国人留学生との出会いを楽しむ

4 年生：交流会を計画し、外国人との体験的なコミュニケーションを楽しむ

5・6 年生：自分たちと異なる文化に出会い、興味をもつとともに自国の文化に対する関心を高める

活動中は、竹早小学校の児童がリードする形で、留学生にけん玉やカルタの遊び方を教えたり、紙やハサミを使って製作の方法を指南したりしながら、クラスごとに活動を進めていく。給食の時間になると、児童が留学生を席に案内し、食べ物の説明をしたり、箸の持ち方を教えたりと、皆で協力してお客様をもてなそうとしているようである。児童たちが、つたない英語と、身振り手振りで一生懸命に留学生と関わろうとする姿が印象的だ。

一方、参加する留学生のほとんどが、それまで日本の学校を訪問したことがないため、竹早小学校での交流活動を通して日本の教育について学び考える貴重な機会となっている。特に母国では現職の教員である教員研修留学生は、まずは竹早小学校には教室と廊下を仕切る壁やドアが少ないことに驚き、それがどのような教育目的によるものかと考える。そして、子どもの主体性やコミュニケーション力を育むためには、どのような学校運営が望ましいのかという視点や、教師と児童生徒との関係性という観点に関心を持ち、更なる探求につなげていく。(なお教員研修留学生の多くは、のちに他の様々な学校を訪問し、竹早小学校の特殊性に気づく。)また、学部レベルの交換留学生である ISEP 生は、「初めて日本の学校を訪問するので緊張していたが、子どもたちが笑顔で話しかけてくれたのですぐに仲良くなれた」、「自分の国の文化に興味を持ってくれて嬉しかった」等、児童との触れ合いを楽しんでいる。お別れの時間になると名残惜しそうにし、涙ぐむ者さえいる。

言葉は国際理解やコミュニケーションの重要なツールではあるが、遊びという楽しい協働体験を通して、言葉に依らない異文化体験や相互交流が可能なのだと、児童と留学生たちの関わりを見ていて感じる。この活動のためにご尽力されている附属竹早小学校の先生方に、この場をお借りしてお礼申し上げたい。

(文責：有澤 知乃)



2011 年度交流会



2016 年度交流会

日本人と留学生の交流事業

2010 年度に、日本理解教育部門が発足し、日本人学生との交流の事業を担うことになった。2010 年2月に、初めての「国際交流合宿」を山中湖畔で行った。以来、多文化交流合宿を含め、2018 年までに 10 回の合宿を行っている。また、2010 年4月から、「国際交流カフェ」を開始し、昼休みの時間帯に、中国語と韓国語で交流する時間「中国語でしゃべランチ」「韓国語でしゃべランチ」を始めた。これは、のちの学芸カフェテリアでの「チャイナカフェ」「コリアカフェ」「欧州カフェ」「アジアカフェ」などに発展した。また、留学生の日本語サポートの場として「日本語支援室」の時間を設け、現在「にほんごカフェ」として継続している。各企画について、この9年間の過程を振り返り、今後、より活発な交流活動へと継続していきたいと考えている。

・国際交流合宿

活動内容は、野外活動(山中散策、ハイキング、牧場体験など)、交流会、発表会などで、2016 年度からは、1日目の夜に、ヒューマンライブラリー形式で、学生がそれぞれの体験などを皆に語る場を設けている。2日目午前の発表会では、3～6名程度の班ごとに、出し物を考え、寸劇(世界の学生生活)、世界のクイズ・ゲーム、世界の音楽・ダンス、折り紙・切り紙体験、世界の民族衣装など、班ごとに工夫を凝らした発表が行われた。企画を考え、練習するなどを通して、学生同士が合宿以前から交流を行うことができている。2017 年から5月末の早い時期に行うようになって、その後の交流につながる春学期一番のメインイベントとなっている。(各回の報告書は留学生センターHPに掲載)

第1回 2010 年 2 月 13 日(土)～14 日(日)山梨県山中湖畔 東照館 49 名(留学生 31、日本人 13、教員 2、取材スタッフ 2) 初めての冬の合宿。交流会、発表会。忍野八海見学。

第2回 2010 年 8 月 7 日(土)～8 日(日)山梨県清里高原 ヴィラ千ヶ滝 42 名(留学生 28、日本人 12、教員 2) 滝澤牧場でバーベキュー、乗馬体験。花火、交流会。班別発表会。千ヶ滝見学。

第3回 2011 年 7 月 16 日(土)～17 日(日)山梨県富士河口湖畔 桜荘。49 名(留学生 31、日本人 16、教員 2) 西湖コウモリ穴、西湖いやしの里根場。花火、交流会。全体発表会。忍野八海見学。

第4回 2012 年 8 月 1 日(水)～2 日(木)山梨県山中湖畔 筑波大学研修所。44 名(留学生 31、日本人 11、教員 2)ハリモミ純林観察ツアー、花火大会、交流会。発表会。

(2013 年は、担当者が北京師範大学交換教員のため不在だったため、行われなかった)

第5回 2014 年 7 月 31 日(木)～8 月 1 日(金)群馬県草津町 群馬大学草津セミナーハウス。参加者 49 名(留学生 38、日本人 11、教員 2)草津温泉街散策、交流会。発表会、白根山ハイキング。

第6回 2015 年 7 月 30 日(水)～31 日(木)千葉県館山市 筑波大学館山研修所。35 名(留学生 19、日本人 14、教員 2)。沖ノ島無人島散策。花火、交流会。発表会、城山公園、館山城散策。

第7回 2016 年 7 月 2 日(土)～3 日(日) 山梨県山中湖村、筑波大学共同研修所。24 名(留学生 18、日本人 4、教員 2)。風穴、樹海、氷穴散策。花火、交流会。発表会。

第8回 2016 年 1 月 23 日(土)～24 日(日)東京都八王子市 八王子セミナーハウス。38 名(留学生 20、日本人 16、教員 2)。多文化共修科目 B、D の合同合宿。ポスターセッション、交流会。ワールドカフェ。

第9回 2017 年 5 月 27 日(土)～28 日(日) 群馬県草津町 群馬大学草津セミナーハウス。50 名(留学生 42、日本人 6、教員 2)。草津温泉街散策。交流会、ヒューマンライブラリー。発表会、白根山ハイキング。

第10回 2018 年 5 月 26 日(土)～28 日(日)山梨県清里高原、小金井市立清里山荘。36 名(留学生 24 日本人 10、教員 2)。滝澤牧場で牛の乳しぼり、乗馬体験。交流会、ヒューマンライブラリー。発表会、吐竜の滝ハイキング。



(発表会:世界の音楽とダンス)



(ヒューマンライブラリー)

・交流カフェ活動「国際交流カフェ」

「国際交流カフェ」は、2010年4月から金曜日5時限目に開始して、9年目になった。2012年度から、学芸カフェテリアの企画として、毎週昼休みのランチ講座としておこなわれている。様々な国の留学生の発表、語学体験、様々なトピックでの交流、各種パーティ(七夕パーティ、クリスマスパーティ、もちパーティ、期末うちあげ)、課外活動(春のお散歩、紅葉狩り)など、日常的な留学生と日本人学生との交流の場になってきた。2018年秋学期からは、「留学生カフェ」に改称した。ランチ講座では、他に、チャイナカフェ、コリアカフェ、アジアカフェ、欧州カフェなど、それぞれの国や地域ごとのカフェが意欲的な学生によって開催されてきた。

2018年春学期 国際交流カフェ

全11回 参加者数 日本人学生36(延91)、留学生22(韓国5、中国5、台湾1、タイ1、スウェーデン4、ウズベキスタン2、ナイジェリア1、フィリピン1、インドネシア1、アメリカ1)(延べ34)(4/25 春のお散歩計10名日本人3、留学生7)

第1回 4/19 自己紹介ゲーム 第2回 4/26 ウズベキスタン編

第3回 5/10 スウェーデン編 第4回 5/17 スウェーデン語で交流

第5回 5/24 韓国編 第6回 5/31 韓国語で交流

第7回 6/7 お話し交流 第8回 6/14 タイ語で交流

第9回 6/21 中国雲南省少数民族について

第10回 6/28 七夕パーティ飾りつけ準備 第11回 7/5 七夕パーティ 最終回



(スウェーデン語で交流)



(七夕パーティ)

・留学生日本語サポート「にほんごカフェ」

2010 年度より、日本人学生サポーターが、留学生の日本語を支援する目的で、「日本語支援室」、「留学生支援交流室」を経て、現在では学芸カフェテリアで「にほんごカフェ」が開設されている。日本人学生、留学生それぞれが都合のいい時限を設定してマッチングする方式でやり、毎週3回程度の時間帯(月4、火4、水4、木4など)で設定され、日本語の支援や会話の相手など、密度の濃い交流の時間として定着している。

2018 年春学期 にほんごカフェ参加者数(延べ日本人学生 36、留学生 66)

・火曜日 4 限 全 11 回 日本人学生 4(延べ 10)、留学生 10(韓国 7、中国 3)(延べ 23)

・水曜日 4 限 全 11 回 日本人学生 4(延べ 15)、留学生 7(韓国 1、中国 5、エストニア 1)(延べ 21)

・木曜日 3 限 全 12 回 日本人学生 3(延べ 22)、留学生 4(韓国 2、キリバス 1、中国 1)(延べ 22)

・学芸カフェテリアとの共催のカフェ講座「海外の学校教育事情」

留学生センターには、留学プログラムの一つである教員研修留学プログラム(研修期間 1 年半)の教員研修留学生が様々な国から派遣される。教員研修留学生という貴重な人材資源を活かし、本学の日本人学生との国際交流を図るため、2013 年 4 月より、カフェ講座の前身である「国際交流特別企画—海外教育事情編」が週 1 回、放課後の 18 時～18 時 45 分に、計 9 回実施された(回数はその年度の来日研修生の国籍による)。実施時間帯を改善するため、翌年の 2014 年 4 月より留学生センターと学芸カフェテリアとの共催でランチの時間帯に実施することにした。カフェ講座の名称は「海外の学校教育事情」に変更した。春学期での開催は、数の多い新入生を主な対象とすることもできるし、大学入学後の国際交流やグローバルビューの向上を図ることも一つの狙いとなる。

カフェ講座は週 1 回、主に英語で実施される。毎回、教員研修留学生が母国の文化や教育事情、仕事の経験談等について語り、研修生のトーク資料のコピーをコーディネーターである教員が事前に用意してその場で配布する。そのほか、コーディネーターは紹介や質疑応答の受付も務める。2018 年の春学期では、8 名の教員研修留学生(スウェーデン、フィリピン、インドネシア、ウズベキスタン、ナイジェリア、タイ、韓国、中国)から協力を得た。カフェ講座の参加者数は、日本人学生 5 名～30 名(理科選修、多文化共生教育、家庭専攻、生涯学習、社会など)、留学生 4 名～9 名であった。

(文責:岡 智之・許 夏玲)



江戸文化体験事業

2016 年～2017 年には、小金井市江戸文化体験事業の一環として、結城座主催による「江戸あやつり人形ワークショップ」と「江戸写し絵ワークショップ」を開催した。当該のワークショップは、小金井市が文化庁の文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業の一環として結城座と共催された。2016 年 11 月 9 日(水)に計 47 名の留学生が「江戸あやつり人形ワークショップ」に参加した。江戸あやつり人形の伝統芸能を留学生によりよくよく理解してもらうため、ワークショップで講演、ミニ公演と体験を行った。結城座の担当者の話では、人形を地面に垂直に立たせるのが大変難しい技という。ワークショップの後、参加者より “It is a tremendous opportunity to get a real-life experience and contact with the Japanese culture.”、「人形を自分の手で持って体験できることがよかったと思います」などの感想が寄せられた。



そして、2018 年 1 月 24 日(水)に計 21 名の留学生が「江戸写し絵ワークショップ」に参加した。ワークショップでは、各班の留学生が「自分のイメージする日本」「日本の冬」「日本のお正月」というテーマで OHP シートに絵を描き、台詞や音楽をつけてミニ作品を発表した。また、発表後に結城座写し絵師による古典演目を実演した。ワークショップの後、参加者より大変好

評を得られ、“I love the workshop. It is fun to know how animation was done in Edo period.”、「見るときはおもしろいと思います。自分で作るときは難しいと思います。」「とても楽しかったです。写し絵について知って、自分でも作ることができてよかったです。」などの感想が寄せられた。



(文責: 許 夏玲)

留学生センター事業一覧

種別	事業名	講師/活動場所	実施年度
講演会	ハワイの日系移民	シロー・マツオ氏 本田 正文氏	2007
	日本歴史・文化講演会「日本の武士」	市川 寛明氏	2008
	日本企業説明セミナー	留学生就職支援ネット NAP	2009
	「在日」の視点から見る世界	蔡 光浩氏	2010
	大谷光瑞：アジアと日本の発見	Briji Tankha 氏 デリー大学	2010
	Unwritten Rules of Communication Style	Karen Takizawa 氏 法政大学	2011
	What Should We Know about Earthquake and Radiation?	鴨川 仁氏 東京学芸大学	2011, 2012
	Okinawan Music: A Minority Culture on the National Stage	Matt Gillan 氏 国際基督教大学	2011
	At Your Konbini: Small Stores, Globalization, and Livelihood in Contemporary Japan	Gavin Whitelaw 氏 国際基督教大学	2012
	Tea Power: Bodies, Myths and Japanese Women Tea Ceremony Practitioners in Modern Times	加藤 恵津子氏 国際基督教大学	2012
	This Spoiled Soil: Defining Community in An Irradiated Village in Fukushima Prefecture	Tom Gill 氏 明治学院大学	2013
	香港における日本語教育の現状と課題	梁 安玉氏 香港日本語教育研究会	2013
	無国籍を生きる	陳 天璽氏 早稲田大学	2015
	日本語学習者の辞書ツールの使用について考える	鈴木 智美氏 東京外国語大学	2016
	シリアに生きる人々、シリアと共に生きる人々の今 (People Living in Syria, People Living with Syria)	Muhanad Aslan 氏	2017
	劇作を通して見る日本語のコミュニケーション	松井 周氏	2017
	多文化を超えて生きる-私の経験から- (Navigating through Multiple Cultures as A "Third Culture Person: An Experiential Sharein")	Jae Park 氏 香港教育大学 (本学客員准教授)	2017
	日本文化の中の忍者 ―現代社会に生かす忍者の心―	甚川 浩志氏	2018
	ロヒンギャ難民の今	長谷川 健一氏 長谷川 瑠理華氏 アウンティン氏	2018
体験見学	「能」公演（初めて観る能の世界）	塩津 哲生氏 塩津 圭介氏ほか	2007
	落語鑑賞教室	三遊亭 楽春氏	2008, 2015
	田植え体験学習	栃木県下野市（林安雄氏宅）	2009
	俳句鑑賞教室	小金井シルバー人材センター	2009
	日本の伝統文化とマナー	永井 とも子氏	2010
	カナダ人落語家「桂三輝（サンシャイン）」の落語の世界	桂 三輝氏	2010

	風呂敷ワークショップ	つつみ 純子氏	2012～ 2014
	盆踊りワークショップ		2012
	日本舞踊ワークショップ	花柳 輔蔵氏 花柳 寿々彦氏 藤蔭 静寿氏 水木 歌寿氏	2012
	歌舞伎ワークショップ	前進座団員	2015, 2016
	貫井嚙子ワークショップ	貫井嚙子保存会	2009, 2013～14 2016
	結城座「江戸糸あやつり人形」ワークショップ	結城座	2016, 2017
	三味線・民謡ワークショップ	浅野 祥氏	2016
	和装文化講座ーお話と体験ー	桂 千佳子氏 着付け隊ボランティア	2017
	和菓子ワークショップ	亀屋（新小金井）	2015～ 現在
	結城座「江戸写し絵」ワークショップ	結城座	2018
	文楽鑑賞教室	国立劇場（小劇場）	2004～ 2015
	歌舞伎鑑賞教室	国立劇場（大劇場）	2004～ 現在
	大相撲トーナメント見学	両国国技館	2009～ 現在
	歌舞伎鑑賞教室（前進座）	浅草公会堂	2015
	日光東照宮例大祭・流鏝馬見学		2017
	防災館体験学習	立川防災館 池袋防災館	2012～ 現在
	自転車安全教室	小金井市警察署	2012～ 2015
交 流 支 援	附属小金井小学校 交流会		2005～ 現在
	附属竹早小学校「留学生交流会」		2008～ 現在
	附属大泉小学校		2009～ 2017
	国際交流合宿	山中湖畔、清里高原、草 津、館山、富士山河口湖	2010～ 現在
	国際交流カフェ、にほんごカフェ		2010～ 現在
	カフェ講座「海外の学校教育事情」		2013～ 現在
	小金井市第四小学校こども祭り （留学生コーナー企画）		2013～ 2016
	東日本大震災被災地の教育支援ボランティア	宮城県石巻市	2011, 2013

	東日本大震災被災児童支援活動 (文房具の寄贈)	名取市名取が丘児童 センター	2012
	都立国際高校国際交流デー		2012～ 現在
	都立淵江高校留学生交流会		2014～ 現在
	多文化交流合宿	八王子セミナーハウス	2015
	都立武蔵高校附属中学校		2016
	都立大島高校交流会		2016
	都立桜修館中等教育学校・留学生から異文化を学 ぶ講演会		2018

10. 教員紹介

自身の留学体験から

有澤 知乃（日本理解教育部門）

ロンドンでの留学体験が人生のターニングポイントとなりました。街を歩けば聞いたこともない言語があちこちで飛び交い（ロンドンでは約 300 もの言語が使われているとも）、大学では学生の半数が留学生で、「イギリス人」であってもルーツはアジア・アフリカ・東欧など様々。日本ではニュースでしか聞くことのない戦争や紛争の実体験をクラスメートから聞くことも多くありました。パレスチナ人の友人が「子供の頃、空爆の中を友達と手をつないで逃げていたら、いつの間にか、握っていたのはその子の血まみれの手だけだった」という話を聞いて、自分が生きてきたのとは全く違う世界に生きる人々の存在やその思いを強く感じました。

私の専門は「民族音楽学」で、人と音楽との関わりや社会における音楽の役割について研究する分野です。留学してから、多文化社会において人々が音楽や芸能を通してどのように自己表現したり、他者とつながったりしているのかに関心を持つようになり、それまで研究していた日本の伝統芸能に加えて、移民やマイノリティの音楽芸能にも研究対象を広げてきました。日本はイギリスほど多様な国ではありませんが、学芸大の留学生たちを通していつも新しい文化や考え方に出会い、世界が広がっていくことに喜びを感じています。

（ありさわ・しの 民族音楽学・日本研究）

〔東京外国語大学外国語学部中国語学科を経て、ロンドン大学東洋アジア研究学院（SOAS）にて博士号を取得（民族音楽学）。著書に *Dichotomies between 'Classical' and 'Folk' in the Intangible Cultural Properties of Japan (Music as Cultural Heritage, 2012, Ashgate)*, Akiko Fujii: *Telling the Musical Life Stories of a Hereditary Jiuta Singer of Japan (Women Singers in Global Contexts, 2013, University of Illinois Press)* などがある。〕

学芸大という場所で

伊能 裕晃（日本語教育部門）

私は、以前、短い期間ですが、学芸大で学生をしていたことがあります。日本語教師となって数年が経ち、自分の仕事に不安や疑問を抱くようになっていた当時の私は、ゼロから自分の仕事を見直したいと思い、学芸大の門を叩きました。幸運なことに、聡明佳麗な島田めぐみ先生に指導教員となっただき、佐藤郡衛先生、林明子先生、北澤尚先生、田中敬文先生、高木光太郎先生など、強烈な輝きを持った先生方からご指導を受けることができました。自分が抱いていた不安や疑問が全くなかったわけではありませんでしたが、学芸大で学んだことで、私はそれまでより「自由」になり、自信をもって日本語教師の仕事に取り組んでいけるようになりました。

留学生センターは、酒神に深く愛された日向茂男先生、世俗に塗れない大言語学者である斎藤純男先生、そして、二十年に渡り、留学生センターの精神的な支柱であられた谷部弘子先生のお三方によってその礎が築かれていますが、この留学生センターには、かつての私と同じように、自分自身に「問い」を持った留学生たちが次々に訪れます。私は、思いも掛けず、今年度より留学生センターで特任教員として働かせていただくこととなりましたが、学芸大でご指導をいただいた先生方に比べれば、まだまだ、未熟な存在に過ぎません。先生方の、知識の深さ、視野の広さ、学生に対する厳しさ、そして、さらには、繊細さ、チャームングさ、茶目っ気、気の強さなど、私には遠く及ばない点が多々

ございます。先生方に少しでも近づき、学芸大を訪れる留学生たちが、振り返って、以前の私のように、「かつて、この場所で私は変わった」と言えるよう、力を尽くしてまいりたいと存じます。

(いのう・ひろあき 日本語教育学、文章・談話論)

[早稲田大学日本語教育研究科修了。修士(日本語教育学)。著書に『日本語能力試験完全マスター語彙』シリーズなどがある。]

学芸大の14年を振り返って

岡 智之(日本理解教育部門)

2005年4月に留学生センターに着任して、もう14年目になります。それまで日本語教育は、日本語学校や韓国などで行ってきましたが、学芸大に来て印象的だったのが、世界中のこれまで全く接したことのない様々な国の留学生と交流する機会を得たことでした。それまで、中国や韓国の学生としか主に接してこなかった私にとっては、世界が大いに広がった印象でした。日本語教育はやはり、世界とつながる仕事だという思いを新たにしました。2010年からは、日本理解教育部門に移り、日本人学生と留学生との交流事業にも関り、学部のA類日本語教育選修の担当として、日本人学生の教育にも携わるようになりました。2015年度からは、「多文化共修科目」を担当することとなり、異文化理解教育や多文化共生教育にも大きく活動の幅が広がってきています。研究に関しては、単著を一冊、共著を一冊出し、認知言語学から場の言語学への転換を図って、世にその成果を問うているところです。大学院教育では、対照言語学や場の言語学を使った教育を推し進めてきましたが、2019年度からの新大学院(次世代日本型教育システム研究開発専攻)でもさらに、実践的な日本語教育の研究も含めて、これからの日本語教育を世界に発信する人材を養成しようと考えています。あと、定年までは10年ほどですが、それまで自分がやれる研究、教育、社会貢献を精一杯やっていきたいと考えています。これから「世界につながる仕事」から「世界を変える仕事」をめざしていきたいと思います。

(おか・ともゆき 言語学、異文化間教育学)

[大阪外国語大学言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程修了。博士(言語文化学)。都内日本語学校、韓国の大学日本語講師を経て、現職。著書に『場所の言語学』(ひつじ書房、2013)、『認知歴史言語学』(共著、くろしお出版、2013)などがある。]

笑顔からはじめよう

小西 円(日本語教育部門)

私は2017年10月に本学の留学生センターに着任いたしました。着任後半年でセンター20周年を迎えることとなり、歴史的な記念の年に居合わせることができたご縁に感謝しております。

振り返ってみると、小学生のころから教員になることを夢見ていました。いろいろな寄り道はあったものの、最終的に日本語教育に行きついたのは、言葉を分析することの不思議な奥深さに魅了されたからです。教育現場に入ってから、多様な学習者が集い、様々な交流が生まれる教室の魅力を知り、日本語教育からますます離れがたくなりました。また、東京学芸大学では、留学生センターに所属しながら、教育学部A類国語科の教室構成員として、兼任で業務にあたらせていただいています。留学生センターで留学生に日本語を教えることと、小学校の教員養成という文脈の中で日本語教育の

考え方や方法を扱うことは、互いに影響を与えあい、私自身に新たな視点や学びを与えてくれます。両者の教育に携わることができる喜びを感じています。

日本語教育に関わりながら自分の人生を生きる中で、いつの間にか強く感じるようになったことが二つあります。それは、「目の前にいる学習者一人一人が、奇跡の連続でここにいるのだ」ということと、「一人一人がよりよく生きるための日本語教育（言葉の教育）でありたい」ということです。年齢を重ねるほどに、一人一人をリスペクトする気持ちが強くなります。留学経験が彼・彼女らの人生に彩を添え、地球市民として互いに理解しあおうとするエネルギーの源となるよう、一つ一つの出会いに感謝しながら、笑顔で学習者に接し続けたいと思います。

（こにし・まどか 日本語教育学・日本語学）

[早稲田大学日本語教育研究科修了。博士（日本語教育学）。国立国語研究所 PD フェローなどを経て現職。著書に『日本語教育文法のための多様なアプローチ』（共著、ひつじ書房、2011）、『コーパスから始まる例文作り』（共著、くろしお出版、2017）などがある。]

この16年を振り返って

許 夏玲（日本語教育部門）

東京学芸大学の留学生センターに勤めて、早いものでもう16年になりました。遠い記憶を辿ってみると、実は東京学芸大学を訪れたのは、1998年5月の日本語教育学会春季大会での研究発表の時でした。当時はまだ博士課程の大学院生でしたが、大学院も住居も長年名古屋でしたので、東京実家の主人のお母さんに頼って東京学芸大学へ連れていってもらったことを覚えています。ご縁があって、名古屋大学大学院の助手を経て、就職先も東京学芸大学に決まりました。最初は、仕事や人々との付き合いなどに慣れないことばかりで、日々、留学生センターの同僚の先生方、職員の方々に支えていただきながら、仕事を進めてきたという感じでした。幸いに、自分の専門や個性に合った仕事をさせていただいてきたため、自分の学習経験や外国人ならではの発想を日本語教育に活かすことができたと思っています。毎日、様々な国籍の留学生とお付き合いをしているため、未だに試行錯誤を繰り返している日々です。たとえば、前にうまくいった授業内容や進み方は、学習者が変わるとあまりうまく受け入れられなかったりすることもあり、学習者の国籍や文化習慣による違いへの気遣いもしたりするなど、時々小さな「国連」にいるような感じもしました。過去に聞いた国際的に活躍されている方の話で、自分が何か世界に貢献しようと思うより、自分なら何ができるかを考えて仕事に取り組むほうが、楽しく、かつ長く続けていけるということですが、私は微力ながらも今後楽しく日本語教育という仕事をしていきたいと考えています。



（ふい・はーりん 日本語教育学） 2017 小金井祭「研究室企画」

[名古屋大学大学院博士課程修了。博士（学術）。名古屋大学大学院助手、東京学芸大学留学生センター講師を経て、現職。著書に『文科系の作文技術』、『意味論と語用論から見る話し言葉の研究』（白帝社）、『わたしの考える日本語教育』（渓水社）、論文に「日本語学習者向けの擬音語・擬態語の学習指導」などがある。]

教え 学び 教えられ

谷部 弘子（日本語教育部門）

大学卒業後、学部の専攻とは異なる日本語教育の世界に出会ってから、40年。海外での教師経験や大学院での研究生活を経て、母校での非常勤講師生活をスタートさせることになった際、恩師から言われたのが「教育と研究の二本足歩行で」ということでした。その後、1990年に本学に着任してから、さらに留学生センターに籍を置いてから20年、「日本語教育」という専門領域の研究と教育を還流させることができる職場で過ごせたのは、たいへん幸運なことであったのだと、あらためて思います。一番大きな比重を占める受入れ留学生に対する日本語教育のほか、学部での日本語教員養成や大学院教育にも関わったことで、還流の経路はさらに広がりました。

しかし、何よりも、毎年迎える留学生との教室や研究室での語らいは楽しみで、彼らのことを少しはわかっているつもりになっていました。が、十数年目にして、ある学部生の活動に目を見開かされました。彼は、留学生にインタビューをし、「渡り鳥の人 My Japanese Style」と題して隔週で記事にしてきました。A4 1枚の写真入りの短い記事に取り上げられた学生はいずれも見知った顔でしたが、いずれも私の知らない生き生きとしたXさん、Yさんで、そこに大括りの「留学生」はいませんでした。教員が授業を通して知る学生の姿などほんの1面にすぎない、ここにいる一人一人に今まで過ごしてきた道のりがあり、見据える未来があるのだ、という当たり前のことに気づかされたのです。以来、私は何も知らないのだ、と心して学生に接するようにしてきたのですが、彼のように留学生の心に分け入ることができなかったことを悔いるより、そのような「彼」と「彼ら」が出会う機会をさまざまに用意することこそが私の仕事だったのかもかもしれません。

（やべ・ひろこ 日本語教育学）

[筑波大学大学院地域研究研究科修了。修士（国際学）。著書に『談話資料 日常生活のことば』（共著、ひつじ書房、2016）、『第2版 日本語教育を学ぶ その歴史から現場まで』（共著、三修社、2011）などがある。]

留学生センター・専任及び特任教員一覧（着任順・2018年12月現在）

氏名	在任期間	所属部門（着任時）	現所属部門・職位（退任時）
日向 茂男	1987. 4～2004. 7	日本語教育部門	（日本語教育部門・教授）
谷部 弘子	1990. 4～2018. 3	日本語教育部門	（日本語教育部門・教授）
斎藤 純男	1992. 4～2018. 3	日本語教育部門	（日本語教育部門・教授）
島田 めぐみ	1998. 10～2017. 3	日本語教育部門	（日本語教育部門・教授）
任都栗 新	1998. 10～2010. 9	留学生指導部門	（生活支援部門・教授）
堀江 プリヤー	1998. 10～2002. 9	日本語教育部門	（日本語教育部門・教授）
川西 結子	2003. 4～2009. 9	短期留学プログラム部門	（短期留学プログラム部門・教授）
許 夏玲	2002. 10～現在	日本語教育部門	日本語教育部門・教授
岡 智之	2005. 4～現在	日本語教育部門	日本理解教育部門・教授
市瀬 博基	2008. 10～2009. 9	短期留学プログラム部門	（短期留学プログラム部門・特任講師）
有澤 知乃	2010. 4～現在	短期留学プログラム部門	日本理解教育部門・准教授
佐伯 英子	2015. 4～2016. 3	日本理解教育部門	（日本理解教育部門・特任講師）
小西 円	2017. 10～現在	日本語教育部門	日本語教育部門・准教授
伊能 裕晃	2018. 4～現在	日本語教育部門	日本語教育部門・特任准教授
谷部 弘子	2018. 4～現在	日本語教育部門	日本語教育部門・特任教授

留学生センター・専門基礎教育部門 [1998. 4～2010. 3] 兼任教員 [留学生専門教育教員] 一覧（着任順）

氏名	部門在任期間	センター所属部門	在任時所属研究室
岸本 義弘	1998. 4～1999. 3	専門基礎教育部門	美術研究室
高橋 久子	1998. 4～2004. 3	専門基礎教育部門	国語学研究室
半田 淳子	1998. 4～2005. 3	専門基礎教育部門	日本語教育研究室
戸田 孝子	1998. 4～2008. 3	専門基礎教育部門	教育学研究室
水津 嘉克	1998. 10～2003. 3	専門基礎教育部門	地域研究研究室
正木 賢一	1999. 4～2004. 3	専門基礎教育部門	美術研究室
大神田 淳子	2004. 4～2005. 3	専門基礎教育部門	環境科学分野
石井 健	2004. 4～2008. 3	専門基礎教育部門	書道講座
久保 知一	2004. 4～2007. 3	専門基礎教育部門	経済学研究室

*1：『職員録』より確認。ただし、2006（平成18年）年版は作成していないとのことで確認できない。

*2：2008（平成20年）年版より「（留学生担当）」の注記が消える。

留学生センター・非常勤講師一覧（着任順・2018年12月現在）

氏名	新規任用年	担当科目	2018担当
高橋 美和子	1998. 10-	日本語	
飯野 清士	1998. 10-	日本語	○
横山 和子	1998. 10-	日本語	○
佐藤 ゆみ子	1998. 10-	日本語	
岩沢 正子	1998. 10-	日本語	
澁川 晶	1998. 10-	日本語	
松崎 寛	1998. 10-	日本語	
五十島 優	1999. 4-	日本語	
坂田 睦深	1999. 4-	日本語	○
井内 麻矢子	1999. 4-	日本語	
松田 文子	1999. 4-	日本語	
串田 紀代美	1999. 4-	日本語	
鄭 寅玉	1999. 4-	日本語	
河野 理恵	1999. 4-	日本語	
伊藤 誓子	2000. 4-	日本語	
笹目 実	2000. 10-	日本語	○
近藤 彩	2000. 10-	日本語	
三枝 優子	2001. 4-	日本語	
小林 孝郎	2001. 4-	日本語	
田村 綾子	2001. 4-	日本語	
川合 泰代	2002. 4-	日本文化と社会	
新谷 あゆり	2002. 4-	日本語	○
松本 明香	2002. 4-	日本語	
郭 珍京	2002. 10-	日本語	
森下 雅子	2002. 10-	日本語	
新井 教子	2003. 6-	ISEP	
今井 美登里	2003. 10-	日本語	○
石崎 晶子	2003. 10-	日本語	○
池田 玲子	2003. 10-	日本語	
小池 恵己子	2003. 10-	日本語	○
桂 千佳子	2003. 10-	日本語	○

氏名	新規任用年	担当科目	2018担当
荒巻 朋子	2004. 10-	日本語	○
宮本 典以子	2004. 10-	日本語	○
東泉 裕子	2004. 10-	日本語	
森 篤嗣	2005. 10-	日本語	
李 貞旻	2005. 10-	日本語	○
李 善雅	2005. 10-	日本語	
小西 円	2006. 10-	日本語	
伊能 裕晃	2006. 10-	日本語	
大内 瑞恵	2007. 4-	日本理解科目	
鈴木 美恵子	2007. 10-	日本語	○
天野 宏司	2007. 10-	日本理解科目	
岩本 泰	2008. 4-	日本理解科目	
馬 欣欣	2008. 4-	日本理解科目	
福島 恵美子	2008. 10-	日本語	○
高崎 恵	2008. 10-	日本理解科目	○
遠座 知恵	2009. 4-	日本理解科目	
立川 明	2009. 10-	日本理解科目	
加藤 拓	2010. 10-	日本理解科目	○
上野 左絵	2011. 10-	日本語	
内田 紀子	2012. 10-	日本語	
目代 邦康	2013. 4-	日本理解科目	
近藤 裕美子	2014. 10-	日本語	
小野塚 若菜	2014. 10-	日本語	
奥山 貴之	2015. 10-	日本語	
小林 正泰	2015. 10-	日本理解科目	
竹本 弘幸	2016. 4-	日本理解科目	
岩崎 拓也	2018. 4-	日本語	○
布施 悠子	2018. 4-	日本語	○
林 亜友美	2018. 4-	日本語	○
李 紅実	2018. 10-	日本理解科目	○

11. 写真からみる 20 年

11. 写真からみる 20 年



中国・修了留学生懇談会（2013 年 8 月 北京）



タイ・修了留学生懇談会（2009 年 8 月 バンコク）



留学生フェア（バンコク）での本学のブース。島田課長と日本語研修留学修了生のパニタンさん（2006 年 11 月）



中国・修了留学生懇談会（2008 年 3 月 北京）



留学フェア@ベトナム、渋谷先生と元日研生のグエンさん（2005 年）



学長主催・留学生の集い（2012 年）



韓国・修了留学生懇談会（2009 年 3 月 ソウル）



2000 年度秋学期日本語研修コース修了式



2004 年秋学期新入生入学式



江戸東京たてもの園見学 (2011 年)



大泉小学校との交流活動 (2012 年)



国会議事堂体験学習 (2012 年)



留学生旅行@箱根 (2015 年)



国際交流合宿@清里高原 (2018 年)



日本舞踊ワークショップ (2012 年)



歌舞伎鑑賞教室@国立劇場 (2018 年)



和菓子ワークショップ (2019 年)

11. 写真からみる 20 年



大学キャンパスの風景



田植え体験学習 (2012 年)



桂三輝さん (元国研生) の落語公演 (2009 年)



落語鑑賞教室 (2015 年)



防災館体験学習 (2018 年)



日本語集中コース (2010 年)



自転車安全教室 (2012 年)



着物の着付けワークショップ (2018 年)



スキー授業 ISEP (2017 年)



江戸文化体験授業 (2016 年)



淵江高校交流会 (2018 年)



大相撲見学 (2018 年)



富士山バス旅行 (2013 年)

留学生センター教職員（2018 年）



加賀美センター長、真鍋事務員、佐藤国際課短期留学係長、センター教員（許・小西・有澤・谷部・岡・伊能）



12. 留学生センターの未来に向けて

留学生センターの未来に向けて

今回の記念誌の企画は、現センター所員の総意のもとで立ち上げられました。実際に資料を整理しながらこれまでの本センターの歴史を振り返ったとき、じつは20年間という歴史が突如として生まれたものではなく、1998年のセンター創設に至るまで、それをさかのぼること約20年間にわたる留学生教育と国際交流の努力があったことに気づかされます。つまり、本学の留学生教育の歴史はじつに40年にも及んでいることになります。このたびこうして節目を祝うことができるのは、これまで積み上げられてきた留学生教育の実績があつてのことであり、本センターが担うべき責務の大きさにあらためて身が引き締まる思いがします。

記念誌には、こうした膨大な成果が盛り込まれました。多くの授業科目が開設され、さまざまなイベントが実現されてきたことは、限られたスタッフによる精力的な取り組みがあつてのことであり、まさに留学生センターの業績を示すものとなりました。また、かつて本学で学んだ多くの外国人留学生とのつながりも深く、今回の記念誌にも積極的に寄稿してくださいました。世界各地からさまざまな興味と目的をもって本学に在籍した留学生の皆さんと、今も多くの交流が続いているのは、まさしく彼らに対する教育・指導が一方的ではなかった証左といえるでしょう。このたび20周年に向けてたいへん好意的な言葉が届き、所員一同、喜ばしく思っております。

さて、これからの留学生センターがこれまでの蓄積を継承し、その成果を損なうことなくさらに発展させてゆくべきは、言うまでもないところです。しかし、それにとどまらず、今後の新しい展開にもアクティブに挑んでゆくことが現所員の使命であると考えています。折しも本学が教職大学院化とともに教員養成の重点化へと学生指導の方針を大きく舵を切るなか、留学生の指導のありかたも変化を余儀なくされつつあります。従来の教育・指導の成果を踏まえながらも、新しい方向づけを考えてゆかねばなりません。もっとも、本センター単独で実施できることは限られていますので、講座所属の教員の皆さまとの連携を強めながら、より広く規模の大きな国際交流を実現させてゆく必要があるでしょう。20周年という節目にこのような記念誌をまとめ、多くの方々に本センターの実情と展望について関心をもっていただくことはきわめて重要だと考えております。

留学生センターには、今後より多くの留学生を受け入れながら国際交流の機会を増やしてゆく、という課題が与えられています。留学生と日本人学生との交流の機会を増やし、本学が養成する教員の資質の向上にも大きな役割を果たしてゆくことが期待されています。留学生センターがますます拡充されることによって、国際性豊かな教育に寄与してゆくことを願ってやみません。

留学生センター長 加賀美 雅弘

留学生センター 20 年の歩み [留学生センター 20 周年記念誌]

The 20th Anniversary Commemorative Issue of International Student Exchange Center

2019 年 3 月 8 日発行編集/発行元：東京学芸大学留学生センター

International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501 Japan.

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~gisec>

